

地域  
福祉の  
諸問題

2017

復刊 第2号



# 地域福祉の諸問題 2017 復刊第2号

## 目次 Contents

1-1	『巻頭言』地域社会の創造とセツルメントの精神	2
	大阪市地域福祉施設協議会 会長 永岡 正己	
1-2	地域と施設「施設と共に」をめざして	3
	大阪市地域福祉施設協議会 副会長 社会福祉法人 育徳園 倉光 慎二	
2	『私たちだからできること～大地協の施設実践から考える～』	4
	= なんでも話そう！なんでも聞いてみよう！大地協 鼎談トークセッション研修会 = 金 恵栄 園長 × 倉光 慎二 園長 × 小谷 啓二 園長	
	セツルメント研究会	
	望之門保育園 佐伯 剛	
3-1	「児童部会」に参加して	28
	地域の子ども研究会	
	長居子どもの家 米田 江里 四貫島友隣館 萩野 遙馬	
3-2	「普通」って？「当たり前」ってなんだろう ～障がい児・者研究会での学びを通じて保育の現場で考える～	32
	地域の障がい児・者研究会	
	わかくさ保育園 山崎奈津未	
4	大地協アーカイブズ	33
4-1	「石井十次先生の没後五十年に憶う」	34
4-2	「ボランティア育成の反省」	37
4-3	大地協アーカイブズに寄せて「共生社会とボランタリズム」	46
	『地域福祉の諸問題』担当 理事 大川 明宏	
	卷末資料	
	大阪市地域福祉施設協議会 会員施設一覧表 2017年5月版	47
	編集後記	

# 卷頭言 地域社会の創造とセツルメントの精神

NPO法人 大阪市地域福祉施設協議会会長 永岡 正己

**大**阪市地域福祉施設協議会（大地協）には三つの大切な理念と特徴があります。第一は、いうまでもなく地域福祉を目指す施設の組織であるということです。それは、それぞれの事業の特性をふまえつつ種別の枠を越えて、地域生活の拠点としての役割を実践し、生活者の視点から地域社会を捉え、そのあるべき姿を追求することです。地域福祉とは何かを実践の中で問うことでもあります。

第二は、セツルメント研究協議会としての原点と精神を継承していることです。セツルメント運動は、地域の暮らしのただ中に入り、人格的な交わりを大切にし、地域の生活力の発展と共に働き力を提供しようとするものです。私たちは、人と人、人と資源、人と制度、人と自然に橋を架け、より良いコミュニティを創造するためにソーシャルアクションを含む主体的でボランタリーな活動を目指してきました。そして実践の中で人間、社会、生活の現実を学び、理解を共有し、問題解決に向かって自主的な調査・研究を重視してきました。その精神を体現する人たちの熱い思いがバトンタッチされて今があります。

第三は、NPO 法人であることです。大地協は、今から10 年前、設立50 年を機にNPO 法人に改組し、地域のつながり、施設の利用者、地域住民すべての権利擁護と自己実現を目的に掲げました。その理由は、各施設は社会福祉法人等に属し、大阪市社協の施設協議会に属しながらも、非営利市民活動として横につながり合い、より広く自由な活動を行うためであったと思います。

**あ**らためて、大地協の歩みを振り返ってみると、初期の共通の課題は学童保育の推進であり隣保館、児童館活動、自然体験事業（キャンプ活動）でした。そして1960 年代半ばからの社会状況の変化を経て、1970 年に調査研究部、青少年問題部会、老人問題部会、保健福祉問題部会が設置されました。この時期から、新しい地域のニーズに対応し、各分野を横断的に捉えて総合的に取り組む努力が進められてきました。

その後の今日に至る社会保障・社会福祉をめぐる目まぐるしい変化の過程、2000年の社会福祉法体制以後の動きと私たちの取り組みについては、ここでは書く紙面がありませんが、丁寧に検証する必要がある課題がたくさんあります。近年、貧困と格差、孤立と排除が大きな課題となり、人権侵害や虐待が深刻化しています。一方では地域福祉活動の組織や権利の具体化が進められてきましたが、他方で、サービスの営利化や自己責任論が強まり、生活保障の仕組みや財政基盤の弱体化が進んでいく状況があります。これまでにない新しい問題にも立ち向かわねばなりません。今、地域共生社会の推進が言われますが、どことなく戦時中の国民総動員のような雰囲気も感じられ、あらためて地域社会の現実から出発すること、私たちの主体的で自治に根ざした進め方が問われているものと思います。

かつてセツルメントは地域における民主主義の実験とも言われ、また人権と平和の実践的追求であるとも言わせてきました。私たちの取り組みには運動としての性格が含まれています。それは、人間の貧しさや弱さを理解し、生活の低い場所から、当事者、住民とともに地域を創り出す隣人としての取り組みです。施設としての働きを通して、地域の中から民主主義を創り出し、生活の中から人権と平和を広げてゆくものであります。大地協が、新しい体制と若々しいエネルギーで、さらに発展するよう願うものです。

# 一地域と施設「地域と共に」をめざして—

NPO法人 大阪市地域福祉施設協議会 副会長  
社会福祉法人 育徳園 倉光 慎二

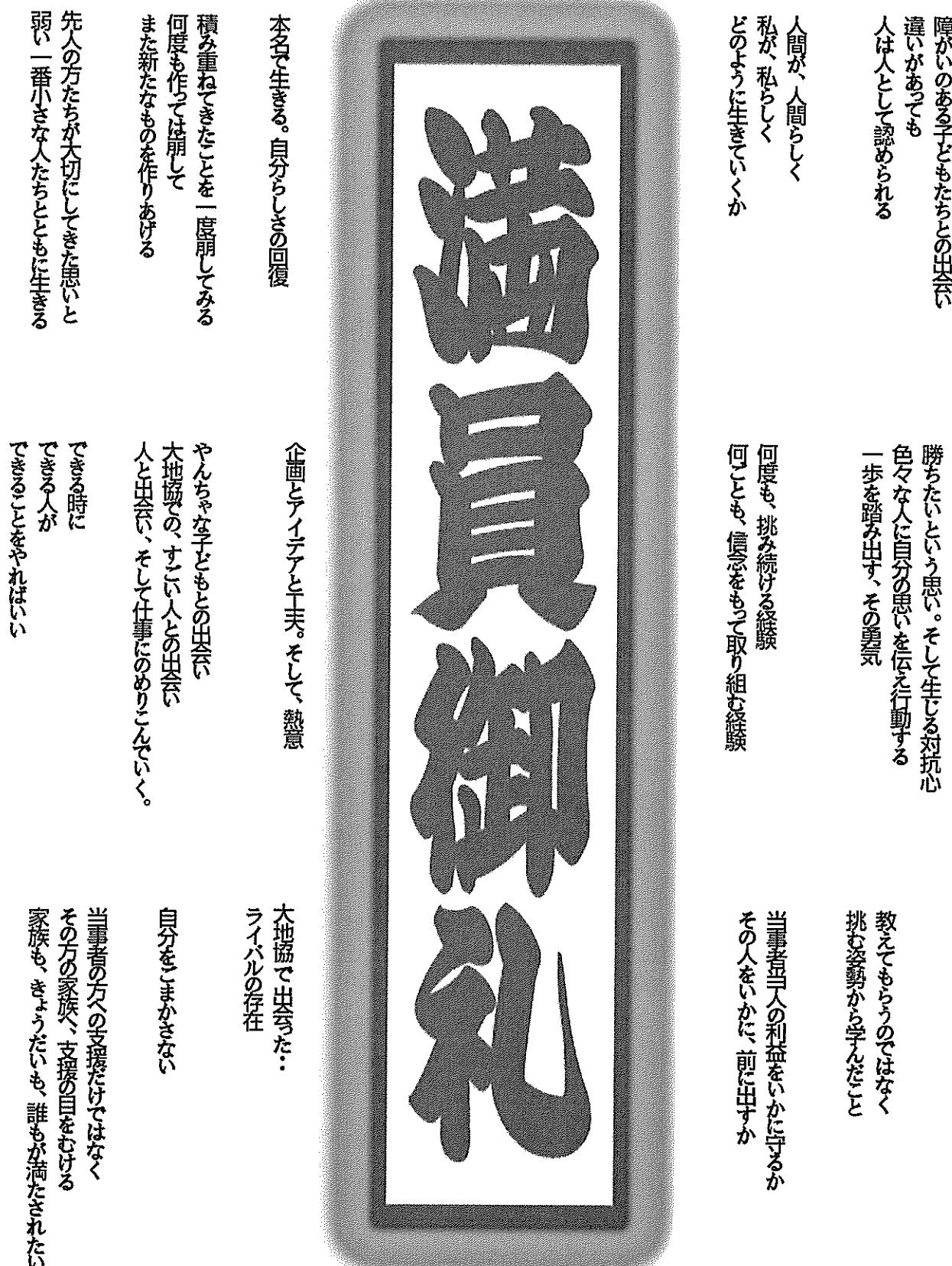
**私**たち福祉施設・施設職員は、施設利用者やそのご家族のためだけの存在ではありません。施設の周りの地域住民すべての方々に対する存在です。それゆえに地域福祉施設と称されています。地域福祉施設として、その使命を全うするためには、まず施設が、そして職員が自他ともに認める地域の一員、地域住民の一員となる必要があります。地域の一員となったうえで、地域福祉や、地域活動の推進役を担う役割が、今求められています。

では、施設が地域の一員となるには、どのようなアクション(仕掛け)が求められるのでしょうか。まずは、①施設を知っていただく取り組み(HPや掲示板で施設行事等のご案内)を実施し、②施設開放(会場の提供など)を行い、そして、③施設資源の提供・活用(物と人)など、取り組みやすい施設アクションが基本となります。そのうえで、①地域イベントへの参加・参画と、②地区社協や、町会活動への参画(役員や委員の一翼を担う)が必要となります。そして、①本来地域が持っている地域力(近所の独居老人の方への昼食や夕食惣菜のおすそわけや、短時間・一時的な乳幼児の預かり機能)を掘り起こし、②施設が地域の資源(団塊の世代を中心とした、比較的時間にゆとりがあり様々な技術や知識・経験を有する方々)を発掘する役割、すなわちエンパワメントを実践することが重要なアクションとなります。

これらの施設アクションを実際に行動に移すためには、まず施設職員すべてが、自分も地域住民であるという職員の意識改革ができるかどうか。さらに重要な視点は、現場のトップである施設長が地域の一員を目指す姿勢かどうかという点であり、それが地域福祉施設としての存在意義に大きく影響を及ぼします。

近年の地域社会において、地域(住民)と行政と社協との協働こそが地域福祉推進の原点と考えますが、施設がこのトライアングルのコーディネーターとして、またコミュニティソーシャルワーカーとしての役割を担うことで、地域が地域力をより強力に発揮できる環境づくりに寄与できることになります。

**行**政や社協はどうしても一定の制約があり、行動が抑制される部分があることも否定できません。その点、施設には自由な発想と、力強い行動力があります。施設の考え方、行動一つで、地域は確実に地域力を復活し、地域福祉の向上に寄与できると確信しています。



金 恵栄 園長 × 倉光 慎二 園長 × 小谷 啓二 園長

『私たちだからできること～大地協の施設実践から考える～』

= なんでも話そう！なんでも聞いてみよう！ 大地協 鼎談トークセッション研修会 =

2017年10月18日(火) 19:30~21:00 会場：育徳園保育所 / 幸分ホール



今回は『私たちだからできること～大地協の施設実践から考える～』というテーマで研修会当日は 110 名もの方が参加した大研修会となりました。

鼎談では、福祉現場において長年に渡り地域福祉に取り組まれている、金 恵栄先生、倉光 慎二先生、小谷 啓二先生の御三方をお招きし、各施設での実践報告をお話しいただきました。鼎談で飛び出した至極の言葉の数々をここに掲載させていただきます。講師の先生の言葉が日々の心の支えとなり、明日への糧となること間違いないしの 90 分ノンストップトークセッション!! じっくりとご堪能ください。

## *Profile*



望  
之門保育園

金 恵栄 園長

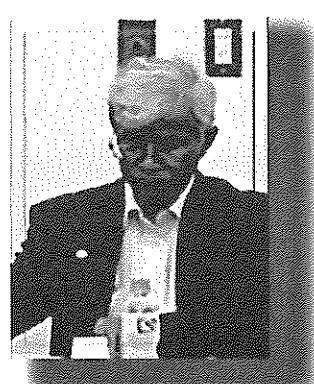
Heyon Kim



育  
徳園保育所

倉光 慎二 園長

Shinji Kuramitsu



愛  
染橋保育園

小谷 啓二 園長

Keiji Kotani

**佐伯** まず緑色の冊子の方は皆さんお手元の方に届いてますでしょうか？ご確認ください。もしなければ、受付の方でお配りしていますので、スタッフまで声をかけてください。ではまずですね、この研修会を始めるにあたりまして、NPO法人大阪市地域福祉施設協議会会长の永岡正己先生よりご挨拶をお願いいたします。

**永岡** みなさんこんばんは。お忙しい中たくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。いま大地協の改革を進めているところで、改革については今日配布されました冊子にも含まれておりますけれども、今回はこれから活動の中心になる方たちが企画し、大地協がこれまで歩んできた歴史と、これからどう発展させていったらいいか、私たちだからできることを、実践の中から考えていきたいということで、金先生、倉光先生、小谷先生から長いお仕事の経験を通して、熱く語っていただきたいと思っております。限られた時間ですけれども、お話のあと、皆さんからもぜひご意見やご感想もいただいて、大地協らしい伝統を引き継いで、自分たちはどう進んでいったらいいのかご提言などもいただけたらと思います。それでは先生方、どうぞよろしくお願いします。

**佐伯** 永岡先生ありがとうございました。まず会を進めるに当たりまして、僕の自己紹介をさせていただきます。僕は今日、研修会を進行させていただきます、望之門保育園の佐伯剛と申します。どうぞよろ

しくお願いします。今日の研修会のタイムスケジュールをざっと説明させていただきます。7時15分より研修会始まりました。7時20分から講師を今からご紹介をさせていただきます。そのあと、小谷先生、倉光先生、金先生のそれぞれのお話をいただきまして、8時25分から3人の先生方によるトークセッション、そして、フロアからの質問、最後に永岡先生によるまとめとさせていただきます。その次は、今お手元にある冊子の『地域福祉の諸問題 2016』の作成委員より冊子に関するご報告をいただきます。9時を終了の予定としています。

では、今回テーマの「私たちだからできること～大地協の施設実践から考える～」の研修ですけれども、この研修会は、セツルメント研究会が企画いたしました。セツルメント研究会の主旨説明を少しさせていただきます。セツルメント研究会では、新たな社会問題、福祉課題の解決と予防という視点をもち、研究活動を行っています。研究会の近年の活動といましましては、2014年度に地域福祉施設職員の皆さんにアンケート調査を実施しました。そしてそれを2016年2月アンケート調査報告書という形で報告書を作成してもらいました。同じく2016年9月に論文、地域福祉の活性化を目指して大地協調査にみる施設の在り方、『大阪市社会福祉研究』第39号に掲載されています。そして本日の皆様の手元にあります冊子、『地域福祉の諸問題 2016』の作成に至ります。以上のような活動とともに今回は研修を企画しました。

研修を企画するに当たっては、セツルメント研究会の若いスタッフの皆さんのが研修のアイデアを色々出してくれまして、今回の研修

の「私たちだからできること～大地協の施設実践から考える～」の研修が実現いたしました。今日はどのようなお話を伺えるのか、楽しみです。では、その講師を快く快諾してくださいました先生方をご紹介させていただきたいと思います。まず一番奥の先生から、望之門保育園園長の金恵栄先生です。よろしくお願ひいたします。続きまして、育徳園保育所園長の倉光慎二先生です。続きまして、愛染橋保育園園長の小谷啓二先生です。では、さっそく小谷先生からお話を伺いしたいと思います。

**小谷 啓二** はい、皆さんこんばんは。今日の顔ぶれを見ると、セツルメントという言葉になかなか馴染みの少ない方もいらっしゃるようですね。セツルメントの意味においては、『地域福祉の諸問題 2016』で永岡先生の文章にて詳しく解説していただいております。今日は、この解説を全部やってしまうということではなくて、どの辺を読んだらいいかというところを紹介します。終わってから目を通してください。まず、34ページにセツルメントとは何かという永岡先生の文章があります。この中で、大阪、大地協がどういう歴史をもってきたか、37ページからありますように、大阪市地域施設福祉協議会の歩みということで、セツルメント研究協議会の設立、その後、大阪コミュティーセンター研究協議会、そして1995年に大阪市地域福祉施設協議会に名称を変えてきております。その後2008年には、大阪市地域福祉施設協議会がNPO法人として法人格をもった団体として活動しています。その基本的精神は、先ほど言っていたセツルメントの精神、

最初の永岡先生の言葉の中にはありますように、地域の人と共に働くというところ、地域の中の課題を見つけて、その中に入り込んでいくことが大きな基本的精神だということで、見ていただけたらなと思っています。

この冊子は、参考にしていただきながら、じゃあ自分がどうこの辺に入り込んできたのかというような経過、自分の話をしながら我々の先輩との企画と合わせて考えていきたいという風に思っております。私たちの前の時代というのは、前々会長の菅先生だと松村先生など、いわゆる学生時代から社会福祉に必死に、入ろうという意思をもってこられた方々がいらっしゃいます。先ほど言っていた私のことを話をすれば、私自身大学の専攻は経済、その経済をやっていた人間がなんで今こういった道にいるのかということなんですが、大学時代ちょうど学生運動がいろいろ分裂していくってというか、軽井沢の事件を起こしたりとか大学そのものがあまり面白くなかったり、そんな時代に経済に入りながら何をやっていたのかといったら、皆さんご存知の方は少なくなったとは思うのですけれども、大阪府の青少年活動振興協会に入りました、学生でキャンプカウンセラーを始めたわけです。それは何をやるのかといつたら、具体的には、能勢にある野外活動センターで夏休みの間ほとんどキャンプ場で生活する。7泊8日とか、そのローテーションが終わったら下の町に降りてきて、具体的には、小中学生の林間学校だと、一般企業の職員研修、あるいは府の行事として、その当時10泊11日ぐらいで小学生高学年、中学生ぐらいの不登校だったり、いろんな子どもたちを募集して、募集するときにそういう

**小谷 啓二 園長**



た子どもたちを集めますよということではやらずに、青少年短期訓練キャンプと我々は呼んでいたのですけれども、そういった活動をやっていました。10泊11日ワンテントワンカウンセラーで、一人のカウンセラーが10人の子どもと10泊ぐらい生活するというようなやり方をしていました。

そうした活動を4年間続けました。それから、もう一つきっかけになったのが、BBSという活動ですね。ビッグブラザーズアンドシスターズ、いわゆる非行少年のお兄ちゃん、お姉ちゃん役になるといった、ボランティア活動をやっていました。これは大学3年生のぐらいのときからですけれども、いわゆる試験観察になった子どもたちのいわゆるお兄ちゃんのような存在になる、あるいは少年院に行った子どもたちのお兄ちゃんになるという活動が、このBBSの活動でやっていたことです。それ以後、子どもたちの付き合いは、やればやるほど、こじれてしまつてから子どもたちと付き合うのは、かなりエネルギーがかかるなど実感しました。大学も、経済論でそれなりの論文を書いて、卒業はすることはできたのですけれども、その時には、一般企業に就職も決まっていました。ちょうど僕が卒業した時期はオイルショックのときで、トイレットペーパー騒動が社会の中では起こっていた時期です。就職先も厳しいといった中で、一般企業に入ったのですけれども、その実習をやる中で、一番疑問に思ったのは、7階建てのビルの4階部分いっぱいにミシンがある。何かといったら、いわゆる百貨店から返品になってきた、つまり百貨店のいわゆる紳士服、あるいは婦人服なんかは、買取り制ではないですから、そのセールスの期

間に売れ残った分だけ企業の方に返す。そして返品された物はどうするのかといったら、スーパーが全部買い取る。買い取るということは、サイズが不揃いですから、かなりリスクを負う。ということで4階にあつたその全てのミシンは、ラベルを付け替えるんですね。タグの付け替えによって4万6千円のスーツが1万9千8百円になる、というこういう仕事、そういった、営業利益を上げることを一生の仕事にするのはやっぱり、嫌だったということから、最初のキャンプ場で出会ったキャンプ長といろいろ相談していて、その会社には入らず、風の子保育園で児童館に入ったということです。

先ほど言つたいわゆる少年院に行って、こじれた子どもと付き合う、かなりエネルギーがいるから、もっと早い段階で付き合うということで、今から42年前に学童保育に入り込んだのです。営業利益を目指す仕事を一生の仕事とするよりも、この子ときちんと付き合って、育てていきたいというのが、僕の中にはあって、現在の意識になつていったというところがあります。まあ風の子に入ったものの、実際には、児童館でどっぷり仕事ができたのは3年間。3年目の途中からは、知的障がい児、現在でいう児童発達支援センターですけれども、その頃は、精神薄弱児通園施設を、大阪市からの委託を受けるということになって、その準備のために、財団法人だったのを、社会福祉法人に切り替える作業を担います。それからその知的障がい児の通園施設の準備を進め、1978(昭和53)年から委託されたわけですけれども、それが軌道に乗るまで、ずっと現場おりました。現場にいながら週末だけは毎週、児童館での子ど

# 小谷 啓二 園長

も会活動をずっとやっていましたので、土曜、日曜日は児童館の子どもたちと接していました。僕の時代に、その児童館に野球部を作り、初代の監督として、日曜日の試合のたんびに出かけていくというようなこともしていました。それが今でも残っている東淀川区にあるグリーンファイターズです。そういう仕事をやっていましたから、もうずっと子どもたちとはつながっていました。知的障がい児の通園施設の後は、今度はその障がい児が大きくなつていって、特別支援学校、高等部を出たら、その人たちの行き先がない。ということから、今度は知的障がい者の通所更生施設の準備をして、そしてまた施設が軌道に乗るまで動いた。相変わらず土曜日とか日曜日は、児童館の活動の方に顔を出す。当時、行事としては、友だち運動会やこの大地協でやっていた行事は、日曜日が多くたですから、倉光さんらと顔を合わします。で、そのまま、活動を続けております。

最終的には、今度は大地協に名前が変わった年、つまり1995(平成7)年には、高齢者の施設の準備をして、高齢者のデイサービス事業を始めるというような形で移ってきてましたけれども、その中で、ただ単に例えば、高齢者の施設でも、引き受けてその、デイサービスをやればいいのではなくて、地域の中の、



高齢者が住み慣れた地域で、最後まで満足して生活できるということを、大きなモットーにしました。だから、その次の年に、地域のお年寄り研究会を作つて、ただ単なるデイサービスだけやればいいのではなくて、やはりそれぞれの地域の、地域性の違いをもちながら、それぞれの本当に住み慣れた、お年寄りの地域での生活を支えるにはどうしたらいいか、ということを考えながら進めてきました。ただ、それが東淀川の一つの所だけではなくて、できるだけ大阪市内のいろんな施設にも考え方を広げていきたいと考えました。大地協の加盟施設のなかで地域在宅サービスステーションが順次できていきましたので、研究会への参加を呼びかけ徐々に参加施設も増えてきました。会場についても各地域性を知っていくということも含めて、持ち回りでやってきた。ところが、介護保険が入つてからはだんだん研究会そのものもちょっと面白みを欠いてしまうのですけれども、でも、それが持ち合せた、当事者本人の立場をどう守るかということが、最大の課題だったわけです。

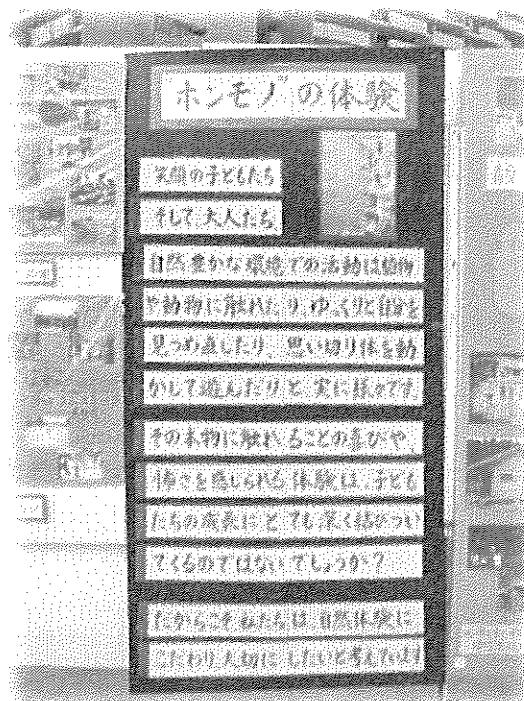
これは、対象の児童館の子ども、学童保育の子どもたちであっても、知的障がいの子どもたちであっても、大人たちでも、その人たちを、どう前に出して考えるか、ということが一番大きな考え方のスタンスだったかなと思います。だから知的障がい児の通園施設の時には、どうしても障がいをもつた人のことだけがクローズアップされるけれども、やはり家族として成り立たなかつたらいけないということで、通園施設でありながら、土曜日の午後には幼稚園などに通っているきょうだいの保育をやりました。最初はきょうだ

い保育とか、まったく発想がなかつたと思うのですけれども、やはり家族全体がうまくいかないと、親の目がハンディをもつた子どもたちの所だけにいくと、どつかで行き詰まり、不登校になつたりとか、やっぱり自分がきちんと満たされたいというのは、きょうだいもみんな持つているというところを、療育というところだけではなくて、それを、前に出して、家族全体を支えるということを進めてきました。もう一つ障がい者で、成人期以降になると、親に深刻な問題が出てきます。特に、だんだん親が高齢化になってきて、親御さんが病気で入院するなどか、いろんな問題が出てきます。これは、児童のときもそうだったのですけれども、障がいをもつた人たちにとって親が入院するのは、制度としては、一時保護という制度もあります。知的障がい児の入所施設に預けるということで、考えられています。でも、本人にとっては、親が病気で入院するという、不安な状態に、全く今まで自分の知らない場所、知らない人のところで、生活するということは、本人にとって三重苦だというふうに感じた。だから、通いなれた施設で、緊急一時宿泊をやりました。つまり、親が病気で入院するという不安はあるけれども、あと、通い慣れた場所で、顔見知りの人が夜も含めてケアするというのは、三重苦の内二つを解決できるのとか、いわゆる緊急一時という制度を作つてきました。それは、先ほど言つていたように、知的障がい児の施設でありながら、いわゆる入所施設に預ける、という従来の制度としての方法だけではなくて、当事者本人がいつたいどう感じるのかというところから、そんなことも考えてきました。その辺は、ほほえみ賞での報告がありますので、また、機会があれば見て

だけたらと思っています。

大切なのは現在ある制度だけで考えるのではなく当事者を主体に考えていくことなのです。よく言われました「お金は後からついてくる」と。時間が迫つてるので、またあの議論に回しますけれども、僕自身が大切にしている3つの言葉があります。仕事を早く、I want to do つまり何がしたいのか、その次に、I can do つまり私には何ができるのか、でも僕は3つ目の I have to do つまり私にはこれをしないとあかん、これが僕の仕事をやつてきた核となっているかなというふうに思っています。また後でお話しさたいと思います。

佐伯 小谷先生ありがとうございます



した。続きまして、倉光先生のお話をいただきたいと思います。倉光先生ご自身と、大地協とのつながりということで、お話を聞いていただきます。それでは、よろしくお願いします。

# 小谷 啓二 園長

**倉光** みなさんこんばんは。この部屋の蛍光灯をですね、この間LEDに変えたところでして、めちゃくちゃ明るいですよね。それで今後はずっと変えなくてもいいことになりました。今まででは1年に2回か3回テーブルを並べてその上に脚立を立てて、サークスみたいな状態で時々替えていたのですけれども、もうすぐ私70歳なんですね。周りで見ている人は「ひょっとしたら落ちるんちゃうかな」という半分期待の目で見てくれているのですけれどもね。もう育徳園にある間、これを替えることはなくなったので、嬉しく思っています。今、小谷先生もですね、今日のテーマに沿っているのかどうかわかりませんが、自分の言いたいことを言っていたと思いますので、僕は喋るにあたり気が楽になりました。私が申し上げたいのは、結局、この世界も、どんな世界でもそうですけれども、やる気ですよ。一步、もう一步だけ前に出るかどうか。もうそこにつきると思います。その辺のことを結論付けるという意味で、私も小谷先生に倣って、この世界に入ったところからお話したいと思います。

さっきの小谷先生の話は、40年付き合っていますけど、初めて聞きました。飲んでもそんな話全然してないです。私は、小谷先生よりももうちょっと前にこの世界に入りました。育徳園保育所、ここは1976(昭和51)年に移転してきたんですけども、ここよりももうちょっと南の方にあった旧園舎、1階平屋の園舎ですけれども、そこに給食の先生、調理員として入ったわけです。最初、調理員の方が体調を壊されまして、私の前任の園長

(竹垣先生)が、ちょっと手伝いに来てくれへんかということで行きまして、そこからどつぶりつかってしまったという訳です。厨房に入りまして、子どもたちに何を食べたいかと話をしましたら、「カレーライス、ジャガイモがいっぱい入っているカレーライスを食べたい」という声が聞かれました。ところがその頃は、ピーラーとかないんですよね。機械が。全部手で剥かないといけなくて、とてもではないですけれども、朝8時過ぎに職場に着いて、11時ぐらいから食べだすのに、ジャガイモを剥いてては間に合わない。どうしたらいいかと考え、ジャガイモを家に持って帰り、夜遅くまで家で剥いていました。あくる日、そのジャガイモを自転車に積み、出勤しました。園ではジャガイモ切るだけなので、ジャガイモたっぷりのカレーライスを作った。そのときの子どもたちの表情というか、うわー、ジャガイモいっぱいやとか言う、その喜びの顔が今だに40年ほど前ですけれども、まだ残っています。そこでやっぱり初めて、誠意を尽くしてやつたらちゃんと伝わって、みんな喜んでくれるんやなという今まで経験したことのない、自分の感情の中の嬉しさがありました。そこから、この福祉、保育、あるいは学童、そういう世界にどつぶりつかってしまうようになったんです。

調理員をしばらくやってたんですけども、昼からは洗い物ばっかりになる。その頃、昭和40年代後半ですけど、学童がありましてね、またそれがやんちゃな子ばっかりなんです。彼らが小学校高学年の頃、それはもうやんちゃで、園舎の2階の屋根にあがって走り回ったりしていました。手が空いているときは、お母さんの相談に乗ったりしてましてね。ま

**倉光 慎二 園長**

あそなこんなで、昼から学童見てくれへんかという、前任の園長（竹垣先生）から言われまして、結局学童保育にどっぷりつかりだしたということなんです。でも、学童をやってると、悪さもするんですけども、こう何やっても、一生懸命やってくれる。ちょっとお山の大将さえおってくれれば、みんなすごい可能性を持つてるんやなということもね、すごく感じることができました。そして学童やりだして、1975（昭和50）年ぐらいに、大地協の学童保育研究会に出会ったんです。以前はコムニュティーセンター研究協議会と言うてたんですけど、その組織の中に学童保育研究会と言うのがありますて、愛染園の小掠先生という方がいてはりました。風の子児童館には、松井さんという今、70歳ぐらいの人がいました。やる気のある人ばかりの集団です。そこの仲間に入らしていただいて、余計この世界にのめり込んだということがございます。



学童保育研究会は、今も地域の子ども研究会として続いてます。その頃は、学童保育

研究会の中で、子どものあそび研究会というのもありました。あそびの研究会をやってますと必ず宿題があるんですね。だいたい1カ月に2回集まりがあるんですけども、次回新しいあそびを必ず持ってくるという取り決めがありました。まあ園に戻ってきて、学童保育の子どもたちと「何か面白いあそびないかー」と一緒にあそびを開発して、それを研究会に持って行き、みんなの前で披露する。その発表を聞いてみんながまたそれを、「もうちょっとこれをアレンジしたらおもしろなるなー」とか言うて、本当にまじめなというか、一生懸命あそびのことばっかり考えてました。そこからスタートし、日本のあそびだけでは面白くなくなってきて、この会場で昭和50年代後半ぐらいから、世界のあそびを研究しようということで、連続勉強会シリーズに取り組み、いろんな勉強会をやりました。例えば、じゃんけん。どんなあるやろうということで、多文化共生センターとかにもいっぱいアンテナを張り巡らせまして、いろんなネタを仕入れて、実践しました。例えば、どこかの国では、じゃんけんってチュイチュイチュイって言うんですね。日本では、じゃんけんほいですけどね。チュイチュイチュイ。もう忘れましたけども、（その国では、じゃんけんのチョキの形は）こうじゃなかつですかね。こうなんです。（親指と人差し指を使って手をピストル型にして）チイはこうなんですね。それで私はそのときからチイはもう絶対これしか出さんようにしてるんです。知る人ぞ知る話なんんですけども。しょうもないこと言いましたね。えー、もうあと7分です。

そういうことで、もう本当に一生懸命と言うか、がむしゃらにやっていきました。いま

# 倉光 慎二 園長

だにそうなんですね、地域福祉とかをがむしゃらにいろいろ取り組んできた。もう数えきれないぐらい。いろんな地域やこの地域のことなど。それから、大阪市私立保育園連盟での児童福祉のこととか。地域福祉、あるいは社会福祉のことなどいっぱい携わっていますが、自分としては、それが地域福祉やとか、これは社会福祉だとと思ったことは1回もないです。これはセツルメントの一角やとかね。そんなん思ったことも1回もありません。結果的に考えると、あれもやっぱりセツルメントやなー。これもやっぱり地域福祉やなーというのが、後から思えばつながってきます。まあ理論づけをすれば、そういうことになるんだなと思うんですけども。やってる当時はね、恥ずかしながら全くそんなん考えてなかったです。もうとにかく皆で、とにかく気合い入れてやろうやと言う風なことで、のりに乗ってやってたという、そういう状況だったんです。今ふと振り返ってみると、やっぱりそんな行動もセツルメントの一環やったんやなと言う風なことに、思いを巡らせる訳なんですけれども。

まあ、大地協との関わりというのも、少し述べないかんと思うんですけども、私ども、それから小谷先生もそうですけれども、指導員のとき、何度も言いますがいろんなことをやりました。一番思ったのは、私と、小谷さんと、小掠さんと、今川学園の小田垣さんの4人がだいたい何でも主導してました。学童保育研究会メンバーの施設を巻き込んで、いろんなことに取り組みました。子どもたちと一緒に企画して、やっぱり一応偉い先生方にお伺いをたてました。その当時は、愛染園の菅先生が会長で、副会長は風の子の松村先

生。「こういうことをちょっとやろうと思つてますねん、いいですか」という一応了解を得るようにしたんです。そしたら必ずね、「あかん、もうちょっと研究する必要があるんじゃない?」と、やらか一言い方なんですけども、全否定ですわ。ほんで、それをまた持つて帰つて、みんなで結局これあかん言われたわ。どないしようと。よし、これでいってみようとOKが出るまでずっと繰り返します。そればっかりやってました。そして了解を得れたところで実践に移す。これはね、今風に言うと、PDCAサイクルというやつなんですね。Plan、Do、ほんでCheckがなんですか。Check、で、またAction。その繰り返しやつたんですね。今、理論づけて言えばそれやつたんやなーと。それを実践してたからこそ、結局みんな子どもたちのためのいろんな行事に結びついたんかなーと思ってます。

例えば、我々の中でやったシリーズ勉強会とか、今もやってます合同運動会。この合同運動会の売りは、小学校にはない運動会ということ。当時、小学校の運動会で騎馬戦とかがなくなったんですよね。怪我したらいかんとか。帽子取りやつたらガッとひつかいて傷作るとかね。そんなんで、みんなあかんようになった。リレーなんて、遅い子は遅い子ばかりで、速い子は速い子ばかりで走らす。今でもそういう風潮がありますけれども、まあそれを打破して、とにかく勝負は勝負やということでやりました。

だから面白かったんです。保護者から、あかんと言う風なことも聞きましたけども、我々信念を持って、昔ながらの部分を大切にしたいと考えていました。遅い子は負けたら

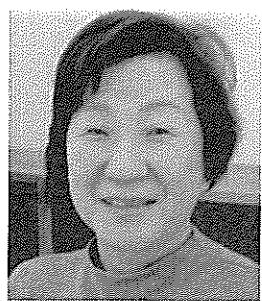


頑張ろと思うんやというそういう信念の元に、そういう取り組みをやったりしました。後は、合同遠足であるとか、合同プールとか、それから大地協バザーいうのも、我々の発想の中から生まれた。もうお金ないなーと。何の行事やるのもお金ないなーどうしよう。バザーでもやって資金を捻出しようかという考えが今のバザーの元なんですよね。自然体験のための費用を集めながら理解を広めるということで自然体験応援バザーを始めた。だけど各施設の施設長さんみんなが、そりゃー金は必要やな。と理解を示してください、ぜひやろうということで、順繰りにやるよになつたんですね。まあそんな状況が、ありまして私なんか、前向きにと言うか、もう一歩何か考えられへんかなーという風なことを今も常に思つてやつております。17分喋りました。すみません。以上です。また後で言います。

**佐伯** 倉光先生ありがとうございました。続きまして、金先生から施設での施設実践と、大地協へのつながりというところでお話しをしていただきます。よろしくお願ひいたします。

**金** はい。金です。打ち合わせと全然違う方向で流れてきているので、せっかくなので、私も脱線したいと思います。私自身は、振り返つてみると「地域」とか「地域福祉」という言葉を、見直す転機が何度かあつたと思います。私は日本で生まれ育つた在日韓国人の2世です。戦後、父は韓国から来日し、小さなときから父の仕事の関係で、何度

選択する勇気  
決めたら進む勇気  
困難にぶつかつたら  
その時に考えればいい



も引越しをしました。名古屋で生まれ、その後、大垣、それから福岡で物心ついて、大阪に来たという私自身の歴史があります。そんな私の生活の中で当時目の当たりにしたのは、非常に貧困で社会的な地位が低かった在日韓国朝鮮人のコミュニティです。私自身もそこで育つていきました。その中でも、私の幼少期は、「本名を名乗る」ということすら、高校受験や就職に支障があつた時代です。私には兄が3人いますが、兄たちも受験とかを考えて通名を名乗り、私も小学校6年生までは、全く違う日本の名前を使って生きてきました。中学校の時に大阪に来て、新たな大阪の在日のコミュニティに出会いながら、ようやく私自身の中に、「自分らしく生きなきゃいけない」という気持ちが芽生え、「本名を名乗る」「韓国人である」というカミングアウトをしていくわけです。

そこから、今度は、韓国人であるという本身がない状況で、私は「キムヘヨン」という韓

# 金 恵栄 園長

国の名前を使って生きる訳ですから、そこの空っぽの所に、物を埋めていくというか、一生懸命韓国の文化や言語を学び、取り戻していくという作業をしていたと思います。そのときに丁度、前の私の職場であった、今は大地協のメンバーの中にも加盟していますが、在日の人たちが密集している生野区の地域の状況を見て保育園を建てようということになつたのです。それが愛信保育園です。ヘップ産業を営み、シンナーの匂いが非常にきつい中、子どもたちが段ボールの中に入つて、お菓子だとか、おにぎりだとかを食べながら、一日過ごしている、そういう状況があつたからです。19年間、私は生野で働きました。生野で、そのときの地域の問題は、貧困の問題もそうですが、「人間が人間らしく、私が私らしく生きる」ということをどう取り戻していくかということでした。

また、その当時は、韓国から職を求めて、密航してきて隠れた生活をしながら、家族を作り、生計を成り立たせている人たちがたくさんいて、そのような家族との出会いもありました。また、ニューカマーと言われて、日本に職を求めたり、結婚のために来られてるというような人たちもいました。そういう人たちと、日本での在留権の獲得のための運動を起こし、子どもたちには、「本名で生きる」ことが、どれだけ大事なのかと一緒に考える活動を、自分自身の人間性の回復と共にやつていった時代がありました。ちょうど40歳を過ぎたときに、あるきっかけで阿倍野区の望之門保育園に来ることになりました。望之門保育園に最初に来たときに、産休明けから預けられるような乳児保育園があつたり、夜の12時まで保育をしている夜間保育園、病

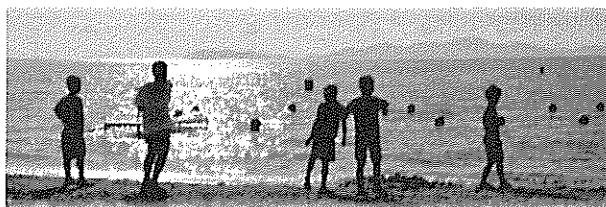
後児保育、学童保育、子育て支援のプログラムとして一時保育があつたり、色々な地域への取組みが盛んに繰り広げられていて「すごいなー」というのが実感でした。

そして、何よりも私にとって大きな出会いは、障がいをもつた子どもたちとの出会いでした。望之門保育園が大事にしている、障がいをもっている子どもたちとの共生保育というのは、私自身がその人間性を回復していくプロセスと同じように、どのような違いがあつても、人が人として認められるということが何よりも大切なのだということを。差別されている中で、形は違うけれども、共感できるものがあったのだなと思っています。でもその望之門保育園の歴史の中でも、障がい児を受け入れるということは、決して簡単なことではなかつたと先代の方たちから聞いています。最初は、きょうだいのお兄ちゃんを預かったときに、障がいを持っている弟も入れてほしいという希望があり「じゃあどうぞ」みたいな軽い気持ちだったと思います。しかし、当時在園の保護者たちから大反対を受け、その障がい児を受入れるなら、自分たちは辞めるといった大きな困難が起つたのです。当時の人たちは、当然大切なこと「差別を受けている一番小さい人と一緒に生きよう」という決断をしたのです。それが望之門保育園の根底に流れている理念だろうという風に思います。

先ほどいろいろなプログラムがあると言いましたが望之門保育園で働きながら、プログラムまあ事業ですね。事業としてはいっぱいあるが、それが当たり前のようになつて、1年間回つていつて、1年終わつた、2年目ちょっとこれ

してみようか、3年目ちょっとこれしてみようかみたいなことは考えていくけれども、そこに関わっている人たちが、本当にそのことに、生き生きと関わっているのかなということを、ちょっと疑問に思った時期がありました。その時に出会ったのが、大地協です。大地協に出会って、今お二人の話にもあったように、『何を言われようと、止められようと、何しようと、やっぱり自分たちで考えてみて、やってみて、あかんかった。やっぱりこうしようか』みたいな、ダイナミズムというのか、躍動感というのか・・組織というのは、どんな立派な事業をしていてもそういうダイナミズムがなければ生きていらないということを実感しています。大事なことをしているのだから、もっともっといい関わりをする職員たちが、自分の目線でやってほしいと思っています。それは園長として今、一番強く思っていることです。

先日、子ども研究会の方が、望之門保育園に来られたときに、ちょっとお話をしましたけれども、今年から次世代育成プロジェクトチームというのを立ち上げました。私もだんだん定年退職に向かって、道を歩み続けていますので、この長い法人の歴史を振り返りながら、変えてはいけないものはなんだろう、そして、変えなければいけないものはなんだろうということを整理する。そして、そこに、誰がどうかかわるかということを整理する仕



事です。働いているとどうしても「これって誰が決めるん?」「園長先生やろー!」とかな

かなか決まらないと、「なんでさっさと決めてくれへんの。私たち動かれへんやん」そういう不満があると思いますが、私としては施設にいる職員たちが、せっかくセツルメントを基盤にする保育園やいろんな施設にかかわっているのですから、「施設長がどうだと、先輩がこう言うから」ということではなくて、主体的に自分で考えて、自発的に動いて、そして、全てのことに「自分がやるんだ」という当事者意識、そこを大事にしてほしいなと思っています。今は、キーワードが、「主体性」と「当事者意識」それを職員たちと、どういう風に共有していくかということを課題としています。以上です。

**佐伯** 小谷先生、倉光先生、金先生ありがとうございました。どの先生方もすごく熱く、わかりやすくお話ししていただいたように思います。小谷先生はですね、地域性の違いだったり、対象となる方の違い、当事者本人の最善の利益をいかに守るのか、その人たちをいかに前に出すのかという当事者主体について語られました。僕たちも日々、利用者と関わる中で本当に大事にしないといけない所だなという風に感じさせられました。誰もが満たされたいというところは、本当に僕たち自身も持っている強い思いではないかと感じることができました。たくさんの施設をつくってこられ、たくさんの対象の方と関わったり、そして僕の家の近所の野球チームの初代監督もされていたことを知って驚きました。倉光先生のじゃがいものお話では本当に子どもたちが美味しいようにカレーを食べているような表情が浮かんできました。誠意を尽くし

# 金 恵栄 園長

てやれば喜ばれてとても嬉しいという話がとても胸に響きました。学童では、すごい子どもとの出会い、大地協では、すごい人たちとの出会いというところが本当に仕事にのめり込む契機となったというところで、「のめりこむ」という表現はなかなか普段使わないけれど、すごく強い力を感じる言葉だなという風に思いました。そして、企画とアイデアと工夫とそして熱意を持ち、何度も挑戦し続ける経験談からは、真意を持ってくらいついてはる人だなっと感じました。

金先生は、僕が勤める望之門保育園の園長先生なんですけれども、本当にこのままのすばらしい方で、私らしくどうしていくのかという所に普段から実践されている方で、僕も知らないような金先生のお話を今日は伺うことができて本当によかったなという風に思っています。このあとは、3人の先生方に先程のお話も含めまして、もう少し深く掘り下げてお話をしていただいたり、御3方の先生で会話をトークセッションという形でつないでいっていただければと思います。

**小谷** 私が打ち合わせとは違い、自分の話からしたんですけれどもこの大地協の理論については、話をし始めたら短い時間では話尽くせないので、いっぺん、自分がこの世界に入ったきっかけから見出していきたいなと思ったのが切りかえた発想なんです。倉光先生からもあったように、40年以上前の学童保育研究会というのは、小田垣さんや倉光さんやら小掠さんたちと一緒にやらせてもらっていました。

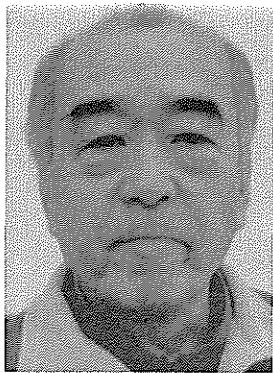
みなさんには、自分の職場も含めてライバルという存在がいるんだろうかということを1回考えていただきたいと思います。僕は、当時も今もそうなんんですけど3人の中でいえば1番若いんですよね…若いけれども子どもの遊び研究会をやったときには「倉光さんにだけは負けるか」としようもないことで張り合うんですね、それが施設に帰って子どもたちとの関わりにプラスになっていた。

誰かにただ教えてもらうという姿勢というのはあまりプラスになっていかない。次に来るときには倉光さん、小掠さんに負けていたくない。一つひとつは大したことなかつたけど気合いが入るんじゃないかな。もちろんライバルは自分の施設の中に作ってもいいです。僕の場合は、たまたま入った研究会でメンバーに恵まれたといったことが、40年以上経ってこういう立場で仕事をしている礎になっていると思います。先程言ったように、知的障がいの施設であろうが、精神障がいの施設であろうが、高齢者であろうが、その発想のもとはそこにあるのかなと…ある意味のライバル心を持つということが僕なりの理論なんですけれども、どうでしょうかね…?

**倉光** 具体的な例を言いますと、さつきから出ている運動会ですけれども、子どもも、もちろんリレーをやるんですけど、メインは、指導員・施設対抗の大人のリレーなんです。「絶対、風の子には負けへんぞ」そのために1週間前から長居公園をランニングです。ただ、風の子に勝つためだけにやってたと…まあ、話はそれだけですけどね…とにかくそういう対抗心や競争心がやっぱり大事



嬉しい  
それで喜んでもらえたら  
まずは誠意を尽くして  
やつてみる



なことやと思うんです。今、僕もこういう立場になって、さっきセツルメントなんて意識してない、地域福祉なんて考えんとやってきたということを言ってますけれども、今私、保育園の園長であり、子どもの家の施設長であり、大地協の会長職務代理という副会長もやり、私立保育園連盟では、副会長もやらせていただいているんです。その立場になると、やっぱり永岡先生が大事にされてる言葉なんですけれども「ソーシャルアクション」というのをいつも意識しているんです。フォーマルサービスではカバーしきれないインフォーマルサービスという、制度に乗つかれない部分をやっぱり意識してなんとか制度づける、こういうことを常々意識している。学童保育でもそうなんです。国は基準を示すのに大阪市はそれに乗つかってくれない。だから、国ほどのお金がこないという風なことを常に思う。それならどうすればいいか…市長に直接面談

を申し入れて直談判しないと。ということで申し入れをして、お目にかかるようになった。こんな風にして自分の思いや、我々の組織の思いをアナウンスしてアピールしていくしかないといけないと思うようになりました。

心の中で思っていても一向に前に進まない。やっぱり行動に移していく。失敗したらまたやり直せばいい。反省してね。さらにもう1歩踏み出すという力がほしい。その気持ちを申しあげている。若い先生をはじめみんなが、保護者支援、書類の整理など、忙しいのはよくわかっている。みんな忙しい。だけど、それを乗り越えてやるべきことをしなければいけないし、もう1歩を踏み出す勇気というのを大地協は求めていると思う。それを言い換れば、一步踏み出す力がセツルメントにつながるのではないかなど感じています。

金

ある会合で「カプラ」の積み木を使って研修し、40人ぐらいの人がカプラで遊びました。すごく慎重な人結構大胆に積んでいく人等とても個性的でした。その中でちょっと気になる人が1人いました。何が気になったかというと基本的にカプラの勉強に来たのにカプラを触ろうとしない。触ったとしても5段くらい、10cmくらい積み上げたらもうやめてしまうのです。何回か様子を見ていたのですが、研修会の運営側だったので、「どうした?」って聞いたら「こわれるのが嫌だから」と答えが返ってきました。「えっ! ?」と思わず声が出たのですが「こわれるのが嫌だからもうこれでいいんです」と言ってしまう。「そうか…」と思いながら段々と時間が過ぎていきました。講師が「作ったのを壊して下

さい」と指示するので「仕方がないで壊す」ことを繰り返し、段々と慣れていくうちに彼女が、終わるころにはナイアガラの滝って知っていますか? カプラをずっと積み上げて1つ外すとずらーっと滝のように崩れていくという積み方があるのですが、それを40人程の人が1つずつ1つずつ積み上げていくんですね。誰が引き金になり積み木が壊れるかもしれない、いつ崩れるかわからないというそういうスリリングな所に彼女が参加していたのです。終わったときに「すごいね」と声を掛けると、「何回か壊してたら、壊すってそれはそれなりに気持ちが良いんだ」ということに気づいたというのです。私は感動しました。それはとても大切な気づきだと思うんですね。

先ほどの話にもありましたけれど誰も失敗したくないし、自分が最初の引き金になりたくない気持ちはたくさんあると思います。私たちが敬愛する阿部先生はいつも「制度は出来たときから古くなる」といつも繰り返し、繰り返し仰っておられます。物も同じですよね、作ったときから古くなる、ということは壊したら新しくできる、楽しみがある。やはり発想を転換していくというか、本当は内心ドキドキしたり失敗したら怒られるかなとか怖い人の顔が浮かんで来たりするけれども、やっぱり失敗を恐れずにチャレンジしようとする倉光先生のお言葉を借りれば、あと一步にということかもしれないけれど、壊して作る、壊して作るということにもっと皆が果敢に挑戦していく。そうすればそれぞれの施設が行っている活動がより生き生きとしてくるのではないかと思います。

**小谷** 40年ほど前のお話ばかりしていましたが、14年前に菅先生から私のとこ



山の家

ろに来いということで愛染橋にきました。たぶん愛染橋に来てからの私の姿というのは私が先頭に立ってやっていくというよりも皆、職員の方を前に出すように切り替えていました。ただ、自分の姿を見せるというよりも地域の人を巻き込むことで愛染橋の中での位置づけをやろうとしています。例えば子育て広場もサロンなども施設が中心になるのではなくて地域の人を中心にながら施設が応援するということを意図的に考えています。愛染橋に来てからの話は時間が短いので十分話し尽くせませんけれども、先ほど言ってたように行動や考え方の基礎になってたのは指導員時代にライバルに出会ったのがヒントになっているということをお伝えしておきます。

**倉光** 金先生はね大阪私保連の理事でもあるし、大地協の理事です。なかなか言うこと聞いてくれませんよ。口ではね「はい」と言うてますけど、やることは違うことやつ

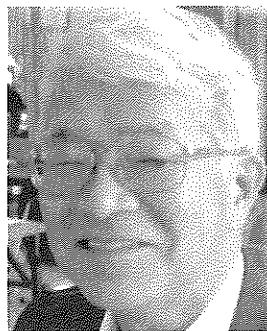
てはりますわ。それで文句言うたら「ああそうやった」とか言って上手い。そういう技を心得てはるんですね。それで皆さんご存知の通り今年の初めから皆さんの所属して大地協が少しマンネリになってるのちゃうか?どんな行事にしても、どんな取り組みにしても、どんな書物にしても、マンネリになってるんと違うかという危機意識があつて、大地協を改革しようということで若手メンバー、中堅、そして施設長、皆が寄つて17の項目について見直しを図つた訳です。何べんも議論し尽くして、以前は全体研修会というのをやつた。そのとき、みんなからの意見をもらって活気が出た。それを再現させなアカンのちゃうかということで今回のこの研修会もセツルメント研究会を中心となって企画してくれました。そして、1月24日にまた第2回をやりますけども、我々やっぱり若いときにいつも思つたことは、我々が施設長に対して菅先生にしろ、松村先生にしろ、育徳園の竹垣先生にしろ、かなり色んなこと言わしてもらつてその度にお叱りを受けて、いや叱られました。叱られるのが嬉しいというかね、多分いつでも了解とられへんなどいつも思つました。そしたら、もしこう言われたらこうしようかとか。那次、次と、そう思うバイタリティーというかエネルギーがその当時ありました。

今、大地協で一番改革せなアカンのはそのエネルギーやと思うんです。一人ひとりがね、さつきから何べんも言うてますが、一歩前へ踏み出すことが、この力がどんだけモノになるかということを思つて大地協改革に乗り出したんです。ですから皆さん「大地協の行事な、誰か行ってくれるわ。いかなアカンかつ

たらいかなアカンな」じゃなしに「大地協の行事やってるから行ってみようかな、行ってみたらええことあるかもしけん」それだけでもかめへんです。やっぱり参加してほしいんです。そして口出してほしいんです、文句言つて欲しいんです、アイデアをぶつけて欲しいんです、アカンかつたらアカンて言います。そして、否定されたらまた次のアイデアを出して欲しいんです。それが大地協の根本の精神なんですよ。これやからこそ熱のある大地協ということやと思うんですよね。今日のこの研修会をキッカケにもし意識を持つ、持つというか上げようという方がいらっしゃつたら、どんな形でも結構です施設長通じてもいいです、仲間同士でもいいです、「こんななんやろうと思つんねん」とかいうことをぶつけて欲しいですね。それで我々役員がびびるぐらいに困らして欲しいなということをすごく思います。ぜひ期待してますのでよろしくお願ひしたいと思います。

**小谷** 菅先生から「学童保育にしても必要なことはやれ、お金は後からついてくる」という言葉をよく聞かされました。ただなかなか今の財政の中では後からついてきませんけれども、やはりきちんとすべきことはやつていかなければいけないと思っています。それともう一点大地協がやってきた自然体験施設応援バザーにしても、とにかく必要だからやってきた、お金が必要だから、でもバザーに理論づけています“色んな人とのつながり”理屈は後からついてくるという風に今は言葉を換えなアカンかなと思っています。でもやはりそこに横割り、つまり現場の指導員だ

# 自分は何をすべきか 自分は何ができるか 自分は何がしたい



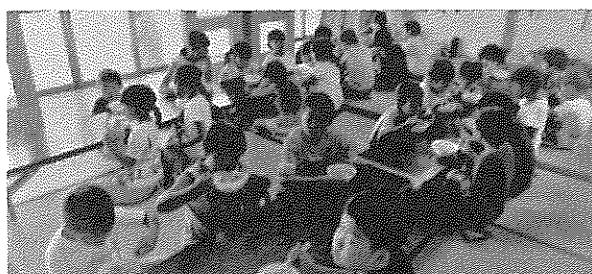
けあるいは保育士だけということではなくって施設長も主任も副主任も皆一緒になってやれるのが大地協かなという風に思っています。ですから2回目の研修をどういった形にするのか相談に乗りながらもこれからも考えていくたいですね。

それで、その中にはやっぱり倉光先生が言わされた通り若い人がどう考えているのかを出していただきたいなどというのはつくづく思います。それと同時に理念をしっかりおさえておくことの必要性もあるので今回の『地域福祉の諸問題 2016』では、かなり永岡先生にも書いていただいておりますので、これはぜひ読んでいただきたいと思っています。それから全国研修、今年は2月17、18日、名古屋の日本福祉大学でやりますけれども、やはりその道を示していただく阿部先生というのは90歳を超えていらっしゃるんですけども、この日地協の研修だけは行きたいとおっしゃっています。短い時間ですが阿部先生のお話も私たちの活動のバックボーンにしなが

ら、やはり先ほどもからお話ししている通り一緒に議論していくことがこれからの大地協の方向になっていくのかなと思います。以上で終わります。

**佐伯** ありがとうございました。僕は保育園でクラスを持っているんですけども小谷先生の「教えてもらうのではなく挑む姿勢から学んだこと」や倉光先生の「いろんなところに自分の想いを伝えて行動する、失敗したらまたやり直せばいいじゃないか、一步を踏み出す勇気」という言葉、また金先生の「壊すことを恐れることなく繰り返し崩してまた新しく積み重ねていく経験」というのは本当に僕自身に思い当たる響くなというお話をしました。それとですね倉光先生からお話ありましたようにこれからの大協フロアからの意見やアイデアでエネルギーが生まれる、叱られる経験も含めて皆さんのがこれからの大協を作っていくんだよというお話をしました。この後はですね、この研修会今日は110名の方が参加してくださっています。今から質問をフロアの皆さんから少し伺おうかなと思うんですけども……。今から倉光先生叱られたりすることはないですよね？質問を受けて叱られたりしないですよね？

**倉光** 大体、全国研修のときは私はフロアにいてるんです。で、今日も動きますけどね。マイク向けられたら必ず質問をする、あるいは感想を述べなければならないというのが研修会の決まりになっていますね。半分寝てた人もかなり起きたようですね。誰が



当たるかなと思いつながら皆ドキってるのでないでしょうか。それでは西野君！

**質問者：西野** こんばんは。ご指名いただきありがとうございます。大切なお話を3人の先生方から伺い本当に嬉しく思います。まず感想です。僕もたくさんの子どもたちと付き合ってるんですけども、子どもの世界や子育て世代の保護者が置かれている社会では、「正しさ」ばかりを求められる気がするんですよね。保護者もそうですし、子どももそう。その中ですごく窮屈な思いをしてるなと思うんです。3人の先生の自由なお話を聞いていて、僕は入職したのが20年ぐらい前になるんですけども20年前からずっと育てていただいた中で、3人の先生方に共通しているのが「自由さ」だと今日話を聞いて改めて思いました。壊す良さとか壊す勇気やったりとか。『地域福祉の諸問題2016』の編集にも携わらしてもらったんですけども、印刷業者に出す締め切りの前日、「西野これアカンで、もう少しやり直せ」という電話が倉光先生からかかってきたんですね。この日に電話をかけるのは、非常に勇気がいったと思うんです。それからもう寝ずに隣にいる大川先生と一緒に何処を直したらえんやろかと一語一句見直しを大急ぎでして、この冊子がなんとか間に合い、さっき届いたんですね。ここを壊せるこの勇気やな、一瞬腹立ちましたけどこれって倉光先生しかできないよなと大川先生と夜中まで喋っていました。せっかく作るのだからいいものを作ろうという意志を感じました。そういうなんと言うか常識や正しさという特定の社会空間で生まれる閉じた概念みたいなものを跳ね除けるその自由

さの源となっている力、一步を動こう一歩を踏み出そうという、皆さんの中にある力っていうのは何なのかというところは多分今日集まっている皆さんのがヒントにもなるんじゃないのかなと思ったのでぜひそこを教えていただけたらなと思います。

**倉光** それは僕に対する質問ですか？えらいなんかご迷惑をかけたみたいで。僕いつも思うんですけど地下鉄乗ってもですね、自分もこの頃高齢者になってきて、この頃は席あまり譲りませんけども「席代わってあげよかなどうしようかな」と思ってそのまま二駅三駅過ぎてよしと思たら降りはった、このときの残念さというか後悔というかそれは経験した人いっぱいいると思うんですね。そんなことになりたくない。だから今回のこれも、この冊子『地域福祉の諸問題2016』は、復刊第1号なんですよ。それで、ずっと読んでやっぱり気になって本当は見過ごしてもいいんかもしれないんですけど気になって気になりだすとこれも気になる。で、とうとう夜遅くに電話入れて「明日出すんやろ。今から直せや」とまだ少し時間あるということでやってもらつたんです。高齢者の方の椅子を譲るゆうのとは、ちょっとちゃうかもしませんけど、もしここで言わんかったら後で後悔するなと思ったんです。それで言わしてもらいました。嬉しいのはそれに答えてやってくれた。これぞ大地協魂、褒めておきます。

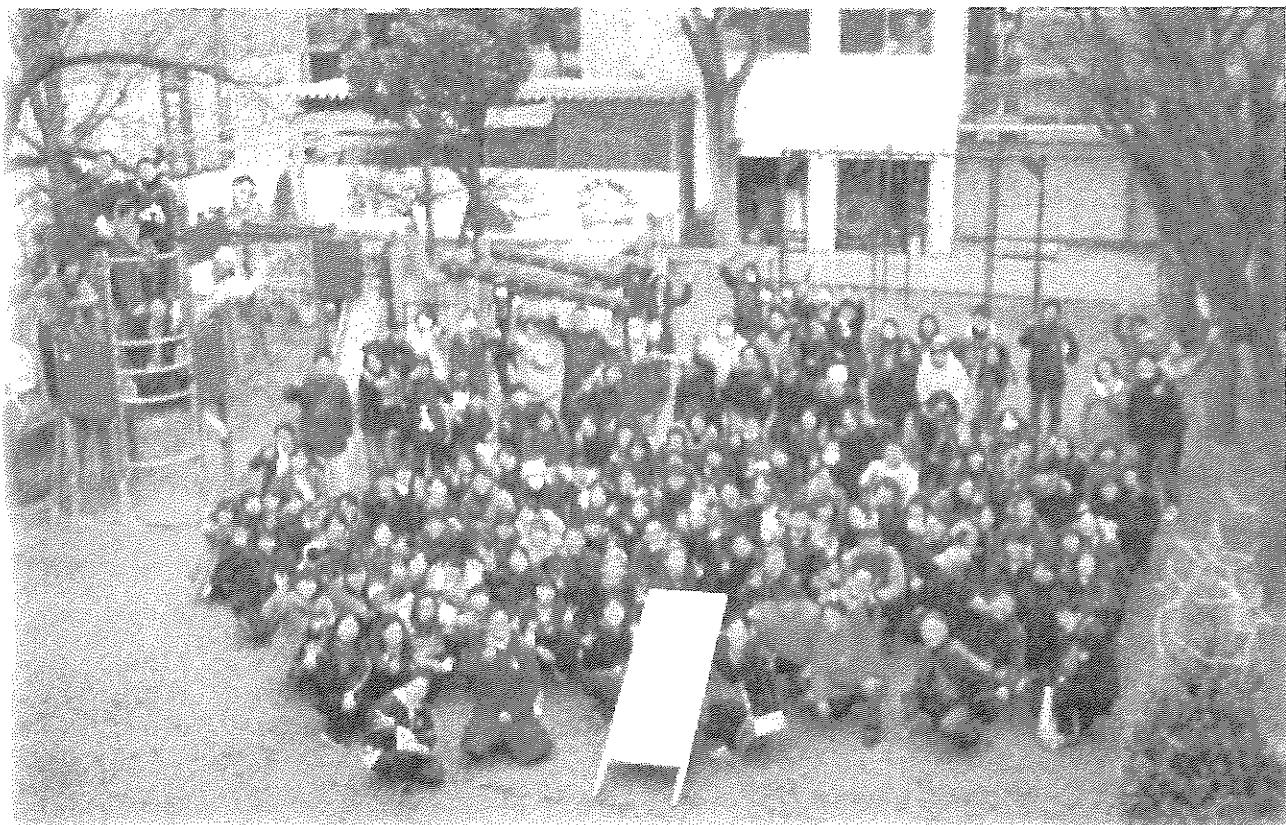
**質問者：西野** 皆さんにその自由さの根源は何かをぜひお伺いしたいです。

**小谷** 根源、先ほどお話ししたように自分の道を変えました。つまり多分あのまま会社に入って売り上げの成績だけを目指していたのでは、一生自分を誤魔化して仕事を続けることになる。そのことに対しての反発がスタートだったと思います。

**金** 基本「私が私らしく、私が大事にされるということを守る」ということであつたのかなと思いますが、先ほど望之門保育園の歴史の中で障がい児を受け入れたときに、健常児の保護者から自分たちをとるのか障がい児をとるのかという問題が起きたときのお話をしましたが、もしそのときに望之門保育園の先輩たちが「わかりました。じゃあその人たちに来ていただかないようにします」という道を選んでいたら今の望之門保育園は全然違う保育園になっていたと思います。人生の中で何かを選択するってやっぱりドキ

ドキするんですよ。それこそ「明日運動会雨だけどどうしようかな」とか「気象予報士が降水確率70パーセントと言ってるけど本当に降るのかな」とか決断を迫られる連続の中でも実は皆迷いながら決めている。でも右って決めたらその決めた中で前に進んでいく、そしてまた別れ道に出会う。そしてまた考える。という覚悟がなければそれこそ「壊れるから触りたくないありません」という少し残念な生き方になってしまふ。そのことはその人の精いっぱいだったので否定しているということではなく、先ほどの倉光先生の話しどもつながるのではないかと思うのです。

**倉光** 最後に僕も一言だけ言いたいんですけども、育徳園の創設者はシャープをつくった早川徳次さんという方なんですね。その先生の語録がたくさんあるんです。その中で一番私が大切にしているのは、「君、なんでもそうだよ。できるときに、できる人が、できることをやつたらいいんだよ」というこ



と。語録の中に、「決して無理をするな」ということを書いてはるんですね。それで、僕は僕なりに自分の施設、今日は出席者14～15名ありますけど、僕なりにアレンジをしています。職員の前で言うのも初めてなんですが、できるときというときを自分で作ろう。できることは自分にもいっぱいあるやろ。できる人になろうという風に思ってるんです。という精神をもって早川前理事長の戒めを心の中に持つて普段接しております。

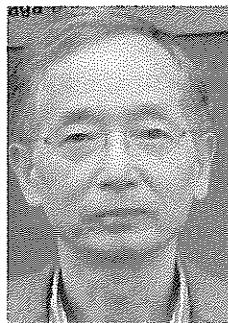
それが心の糧になってるんです。実は今日もさっきまで職員会をやってたんですね。そのときに1ヵ月の検討事項があつて大掃除の日程を12月3日(土)にしましたという報告がありました。「その次の土曜日は行事が詰まってますから12月3日にしました」ということです。どうしても僕黙ってられへんので言わしてもうたんです。「年末の大掃除何のためにやるか知ってるか?掃除をして、自分の周りも一新してきれいにして新しい年を迎えるという意味があるんやで」と言わしてもらいました。それを12月3日は、早すぎるやないかという風なことを言わしてもらいました。我々は保育士、やっぱり子どもは背中を見て育っていく。大切なところを見逃してないかということを言わしてもらいました。だけど、「もう保護者の人にも連絡していく、予定組んでもらってるから今年はこれでいきます」ということです。そこはもう僕もだいぶ年ですので妥協しましてね。「そらもうしゃあないな」と。せやけども、本来なら大掃除は年末にやるものだと思っています。そして、「綺麗になった中で新しい年を迎えます」ということを来月のお手紙にその一言は付け加えといでやということで妥協したんです。我々

ね、なんというかドップリつかってしまうと、その一番最初の部分を見失ってしまうと思うんです。一步踏み出すんもええけど、半歩後ろに下がるということもすごい大事なこと。さっきの座席の話しや無いですけどね。やっぱ言わんかったら後で後悔するなと思って言わしてもろたんです。

**小谷** 大地協のこういった企画をするときに本来ならもう一人小掠さんも一緒に話ができたらなと思っていました。小掠さんも多分言うとしたら小掠さん自身の愛染園に入ってきた経過のところがキッカケになっているのかなと思うんです。つまり児童養護施設に勤めてそこでの子どもの扱いを疑問に思ったところからこの保育の世界に入ったというところがあります。やはりどう子どもたちが扱われているのかそれが引き金というかバックボーンにあったのではないかと思います。亡くなつて5年も過ぎましたけども、多分そのことは伝えてほしいと願っているのかなと思っています。なんかここに一緒に居るような気がしているので付け加えさせていただきます。

**佐伯** ありがとうございました。では研修の最後に永岡先生よりまとめの方お願いしたいと思います。





NPO法人  
**大**阪市地域福祉施設協議会  
**永岡 正己** 会長  
*Masami Nagaoka*

**永岡** どうもありがとうございました。先生方の歩みについて、初めてお聞きするお話もあって感動しました。こうやって仕事をしてこられたんだなということを実感し改めて力をいただきました。実は、私は小掠先生と倉光先生、小谷先生からお話をあって、松村寛会長のご勇退に際して後任の会長を担当させていただくことになりました。施設の立場ではなく適任でない私が会長を務めていますのはそういう経過があるからなんです。大地協は元々大阪セツルメント研究協議会としてセツルメントの理念にもとづく施設の連絡協働の組織であると同時にセツルメント運動の理念を基盤にして研究を行う組織であることが出発点にあり、その精神をしっかりと守れということであったと思います。

今お話にありましたように、大地協は、みんなで事業をつくっていく、自分たちでたえず一緒に議論してワークショップのようななかで学びあって、研究的な視点を大事にしていく。今地域の中でどういう問題があるか、子どもたちに向かい合う仕事の方が多いですけども、家庭がどうなっているか、貧困がどんな状態か、地域社会のつながりがどうなっているか、それらを生活の視点から研究的にもきちんと明らかにする。そして、それに 対してどう対応するか、いろんな制度や資源

も使いながら、工夫しながら新しい活動を生み出していく。当事者の視点に立って地域の人たちが一緒に問題を解決していくように取り組む、生きる力を高めてゆく、そうやって施設を拠点にしながら誰もが暮らしやすい町にしていく。セツルメントの精神はもともと隣人としての人格的なつながりによってコミュニティをどうつくるか、共に生きる協同社会をどう運動として創造するかが基本にありました。そのためには、生きた調査をし、問題を発見し、解決のために、さまざまな方法でアクションを起こし、道筋をつくり出す。そのことを大事にしないといけないと思います。それは先人が苦労しながら辿ってきた道です。その意味で、私たちは、施設だけの個々の働きや連絡調整だけではない、研究的で運動的な精神をもつ大地協の歴史、原点を大事にせよということを付託されているのだと思っています。

大地協にはそういう長い歴史があります。松村先生が最近、大地協の戦後の出発点について書いておられましたが、1957年に隣保事業の第2回の全国会議が大阪であったときに、社会福祉事業法の第二種社会福祉事業として隣保事業が法制化されて、全国の動きは終わるのですが、それに対して大阪では戦前からセツルメントの組織がずっと続けられていて、戦後も早くから組織を再建してセツルメントはいかに働くかずっと話し合ってきましたから、その後もさらに活動を発展させ、各分科会も組織して力を合わせて取り組んできました。こうした取り組みを経て、1970年代から阿部志郎先生を中心に全国の組織をもう一度つくろうという動きがあり、中断したのち大地協の呼びかけもあって

日地協の活動が再開され現在に続いています。先ほどの熱く分かりやすく語っていただいたそれぞれの先生方の歩みには、そうした背景があり、創造性、先駆性、開拓性といった、大地協が育ててきた精神が詰まっていると思いました。

今日のお話には、どの分野の施設でも、どの仕事にも通ずるお話もありました。どのように職場の中で仕事を進めていくか、それを施設全体の取り組みへとどう動かしていくか、一人の思いを他の職員、また上司にも伝えて、良い活動をつくりだしていく、伝える力がある人は動く。そのための生き方やエネルギーの大切さも教えられたと思います。また、個別支援、狭い専門性だけに終わらずに、たえず地域への視点をもって人と人をつなげていく、それを仕事の中で生き方として体現して、地域社会を動かしていくような力が必要です。そういう取り組みが私たちの活動にはあるということも思いました。

これから第2回、第3回と重ねて、先達の取り組み、実践の経験をお聞きして、これから私たちが何をするのか、理論的なことも含めて考えていきたいと思います。セツルメントの精神についても、いろんななかたちでこれからも皆で学びたいと思います。セツルメントは過去のもののように言う人がいますけれども、その精神、大地協の原点を現代的にどう発展させるかが、今こそ問われているとも言えますし、今の取り組みが未来には歴史になっていくことを忘れないようにしたいと

思っています。

今回は、皆さんのご意見や感想を直接お聞きすることが出来ませんでしたが、提言もぜひお願いしたいと思います。活動の中でお互いに力をもらい、それぞれの職場で「明日も頑張ろう」と思えるような、前に進んでいく場として大地協が機能していくように、さらに話し合い、活動の発展を目指していきたいと思います。

3人の先生方、司会の佐伯さんに、もう一度お礼申しあげます。準備運営に当たっていただいたセツルメント研究会の皆さん、明るい素敵な会場をご準備いただきました育徳園の皆さん、ありがとうございました。これからも力を合わせて取り組んでいきましょう。

**佐伯** 永岡先生ありがとうございました。今日は最後にですね3人の先生方に現場の先生方がたくさんいらっしゃっているので応援のメッセージをいただこうと思っていたんですけども、時間が無くなってしまいました。ただ、今日最後の最後までお話しいただいた一言、一言というのは僕たちの背中を押してくれる力強い言葉ではないかなと思います。ですので、まだまだお話を聞きたいことはあるかとは思うんですけども、次回研修会はですね 2017年1月24日の火曜日を第2回として予定を組んでおります。

## 金 恵栄 園長 × 倉光 慎二 園長 × 小谷 啓二 園長

### 『私たちだからできること～大地協の施設実践から考える～』

= なんでも話そう！なんでも聞いてみよう！大地協 鼎談トークセッション研修会 =



鼎談司会 /紙面デザイン・構成・編集  
望之門保育園 / 佐伯 剛

*Takeshi Saeki*

## 鼎談を終えて / まとめ

今回の鼎談では3名の先生方の若かりし頃から現在に至るまでの様々なできごとの中で訪れた喜びやご苦労を交えてお話しを伺うことができました。お話しを拝聴する中で…苦難を乗り越えるときに必ず先生方の隣、周囲には人という存在がいらっしゃいました。その人はときに先生方の支えとなり、その人たちとともに苦難を乗り越えてきたというお話しがありました。支えてくれる人はときに家族であり、職場の仲間であり、地域の方であり、利用者の方であり、子どもたちの存在が見えました。先生方のお話しを拝聴する中で今回の鼎談のテーマ『私たちだからできること…』とは、人とともに歩むことにあるのではないかと感じました。自身が人生を歩んでいく中で訪れる、喜びや嬉しさ、そしてときに悲しみを隣にある人とともに分け合い得るもの、それこそが自分の原動力となるんだということを確信することができました。今回の鼎談の時間をともにすることができた参加された仲間の皆さんとの出会いに感謝します。そして貴重なお話を通じて、人とのつながりの深さ温かさ豊かさ“今を生きる力”への学びを与えてくださった金先生、倉光先生、小谷先生に、参加された皆さまを代表して厚謝を申し上げます。また次回もこのような素敵な時間をともにできる日を心待ちにしながら、私も日々人とともに歩んでまいりたいと思います。ありがとうございました。

# 児童部会に参加して

長居子どもの家  
四貫島友隣館 米田 江里  
荻野 遙馬

**私**は昨年、一昨年と年長クラスの担任をしていました。保育現場では学童の子どもたちとの関わりがほとんどなく、就学後の子どもたちとの関わりもなくなっていました。就学前の子どもや保護者との関わりはあったものの、当時子どもや保護者が感じていた不安に寄り添えていたのか自分自身を振り返ってみると、もっと出来ることがあったのではないかと思いました。

**1**日目の分科会内にて、就学前に感じる保護者の不安により、子どもも不安になっているのではないかという話になりました。年長児の担任をしていた頃、子どもから不安を感じる声はなかったものの、保護者からは「まだ字を書けない」「周りの子にうまくなじめるだろうか」などの声はきかれていきました。そのときに、私自身が就学後の子どもについて少しでも知る事ができていれば、そういった不安の声にも安心してもらえるような言葉掛けや働きかけができていたのではないかと思いました。

**2**日目の全体会のテーマになっていました、「小学生の実態を幼児期に遡って考える」という事について、学童に通ってくる子どもたちだけでなく、卒園後の子どもたちとの関わりを持ち続けていくことで、これから就学を迎えていく子どもたちに必要な支援も見えてくると思いました。

今回、全体会ではパネリストとして参加させていただきました。一緒にお話しさせていただいたお2人の先生方のお話を聞かせていただき、幼児期から学童期に向けて子ども

や保護者との関わりをより深めていかないといけないと思いました。悩みや不安を共有し合う中で新たに気付ける部分があつたり、一緒に考えていけることがあると感じました。

**鼎**談をさせていただく中で、私から“就学前気になっていた子が就学後、小学校でうまくやっているのか気になっているが知る術がない”という話をさせていただきました。就学後となるとやはり小学校の先生とのつながりが必要になってくるということでお話を聞かせていただきましたが、なかなか難



しいことだと思います。全体会に参加されていた他の施設の方の中にも、小学校の授業に定期的に参加されたり先生と面談されているところもあることを知りました。そのように小学校との関わりが密に出来れば就学前から就学後も子どもたちと深く関わっていくと思いました。

2日間参加させていただいて、学童指導員としてこれから就学を迎える子どもや保護者、また、就学後の子どもたちにどういう働きかけができるのかを考えていきたいと思いました。そして、今回多くの先生方よりたくさんお話を聞くことができ貴重な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。  
(米田 江里)

**昨**年度から地域の子ども研究会には参加させていただいていましたが、児童部会には今回初めて参加させていただきました。

今回の児童部会は大阪が会場だったこともあり運営にも関わり、私は主に第2分科会の「学童期における遊びの現状と課題～私たち（保育士・指導員）の役割を考える～」に参加させていただきました。子どもたちが成長していく上でなくてはならない「遊び」の現状、子どもの生活と切り離せない関係になっているテレビゲームや携帯ゲームのメリット・デメリットを考え、指導員として子どもたちにできることは何かを考えていきました。

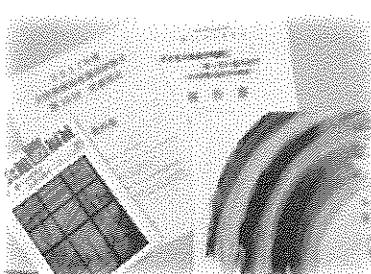
**発**題者として事前に話し合う中ではデメリットが多く上げられ、当日もテレビゲームを与えるのはよくないという話題になるのではないかと考えていました。しかし実際には、いろいろな世代・地域から集まつた指導員の方たちが参加され、多くの意見が出てくる中でそれまで自分の中や話し合いで出てこなかったような考え方があることが分かりました。テレビゲームのメリット・デメリットも理解したうえでうまく付き合って行くべきであること・子どもたちがそればかりにはならないように学童という場でいろいろな遊びの選択肢を提供することが学童指導員という立場でできることなのではないかと思いました。

全体会では保育士、学童指導員の両方を

経験されている先生の鼎談を聞き、それぞれの先生方が、経験したからこそ分かるかかわりや必要な支援についてお聞きすることができました。それぞれの保育園によって学童期に向けての活動は様々だと思いますが、私は保育園で働いた経験がなく、幼児教育というものがまだ十分かつていないまま今に至るのでどの話もとても新鮮でした。そして保育士・学童指導員がそれぞれ共通の必要としているものがあると分かりました。小学生と関わっていく中で、「この子は保育園のときにはどんな子だったのだろう。どんな生活をしてきたのだろう」と思うことも少なくありません。しかし、十分に保育園の先生とお話をする機会が持てなかつたり、学童の部屋に閉じこもりがちになり現在の子どもの姿を保育園の先生に見てもらうことが頻繁にはできていないことなど現在の保育士と学童指導員の相互の関係は密な連携が取れているとは言えない状況もあると思います。お互いのかかわる子どもたちがどんなことを必要としているのか伝え合い、一緒に考えていくことが第一歩だと思いました。

普段関わることのないような地域や年代、経験豊富な指導員の方とお話をすることで、自分の中にはなかった視点や考え方をお聞きすることができ、とても勉強になりました。これからの活動で活かしていきたいと思います。

(荻野 遙馬)



# 2017年度 全国地域福祉施設研修会

## 第16回 児童部会 開催要項

今年も児童部会の季節がやってまいりました。今年度は住之江区の「やまと保育園」と阿倍野区の「阿さひ保育園」で開催いたします。

学童保育の指導員には、子ども・子育て支援新制度の実施に伴い、放課後児童支援員の認定資格が必要となり、より保育の質と個々の専門的な知識・技術が求められてきている流れです。こういった新制度と認定資格取得といった大人の事情が、現在関わっている子どもたちにどういう変化をもたらすのでしょうか？

今研修会では、同じ小学生と関わる小学校教諭からの視点を踏まえた子どもたちの姿や今の子どもたちの遊びから見える姿等を幼児期の保育に遡って討議・共有します。

保育士・学童指導員・施設長・保護者・小学校教諭・地域に過ごす方々みんなで子どもを見守っていくための意見交換の場となるよう大いに学び合いましょう。

### 記

テーマ	「幼児期の関わりと小学生の実態」
日 時	2017年9月23日(祝)午後1時～24日(日)
会 場	社会福祉法人大和福祉会 やまと保育園(23日) 社会福祉法人清栄会 阿さひ保育園(24日)
主 催	日本地域福祉施設協議会 NPO 法人大阪市地域福祉施設協議会
参 加 者	児童館、学童クラブ、学童保育、子どもの家、放課後児童施設 NPO 関係者、ボランティア、研究者、行政関係者、学生他

# 日 程 (プログラム)

23 日 (1日目)	12:00 13:00 13:15 15:00 15:15 16:00 18:00	※昼食を済ませてお集まりください。 受付開始 開会式 テーマ別分科会 分科会終了 施設見学・地域探索 天王寺移動開始 ※ホテルの手続きなど 懇親会
24 日 (2日目)	9:00 9:30 11:30	受付開始 全体会 閉会式

第1分科会	<p><b>幼児保育から学校教育への接続期の課題・不安を探る</b>  <b>～アンケート調査結果を踏まえて～</b></p> <p>2016 年度に大阪市地域福祉施設協議会、地域の子ども研究会にて幼児保育から学校教育への接続期の課題・不安を探る事をねらいとして、就学前の幼児(年長児)を持つ保護者と同施設年長児担任保育士からアンケート調査を行いました。大阪市の私立保育園 43 施設から 996 名の保護者、76 名の年長児担任保育士から、就学への不安や家庭での就学前学習や日々の取り組み等をご回答頂きました。</p> <p>就学前のアンケートを元に保護者の不安に寄り添い、接続期に子どもたち・保護者が安心して過ごす事が出来るよう、地域福祉施設・職員として何ができるのかを、就学前・後の保護者の不安の移り変わりを見つめながら討議して参りたいと思います。</p>
第2分科会	<p><b>学童期における遊びの現状と課題</b>  <b>～私たち(保育士・指導員)の役割を考える～</b></p> <p>子どもたちは遊びによって様々なルールや人間関係の基礎を培っています。遊びは人間が生きていく上で必要不可欠なもので、幼児期、学童期には非常に重要です。この分科会では学童期の子どもたちを取り巻く遊びの現状を施設内・外から捉え、考察を深めていきます。多様な IT 文化が子どもたちに与える影響についても、そのプラスとマイナスの両面を見つめ、私たちの果たす役割について考えましょう。</p>
全体会	<p><b>小学生の実態を幼児期に遡って考える</b></p> <p>幼児期、特に就学前の保育は「小学校へ向けて事前準備の保育を行う」「環境の変化に伴う子ども達の躊躇を無くす為に力を養う」ものではなく、子ども達が自尊心を培い、自身で躊躇を乗り越える力を養うものだと考えます。幼児期には“今の保育(遊び)がどのように育っていくのか”を見通した実践を、学童期には“今の遊びがどのように育ってきたのか”を理解した上で実践をと『連続性・一貫性』をもつて行うためには、相互理解が必要です。全体会では学童指導員を経験され現在保育現場で勤務されている保育士から、小学生(保護者)と関わってきた事により今の保育現場で活かされている実践等を聞き、幼児期・学童期に必要な支援を考えていきたいと思います。また、地域に過ごすみんなで子ども達を見守るという視点で、個人・職員・施設として何ができるのかを討議したいと思います。</p>

# 「普通」って？「当たり前」ってなんだろう

## ～障がい児・者研究会での学びを通じて保育の現場で考える～

石井記念愛染園 わかくさ保育園 山崎 奈津未

「わかくさ保育園」は、大阪市西成区の釜ヶ崎（あいりん地区）にあります。私は、10年勤める中で、たくさんの子どもたちと出会いました。

私は、入職してすぐのころ、発達の気になる子どもへの理解が未熟で、かかわり方に悩み、涙したり、感情に振り回されたりすることが多くありました。

**午**長の担任をしていたときに出会ったAちゃんは、友だちに対して優しくかかわる姿が見られたり、私の膝に座り肌と肌の触れ合いを求めたりすることがよくありました。しかし、集団に入ることは苦手で、気分や態度の変動が激しく、友だちに乱暴をする姿もよく見られました。そのようなときは、おとなの言葉が届かないことも多く、私も感情的に怒ってしまうこともあります、「困った子だな」という気持ちになることがありました。

当時私は、「クラスのみんなに対して平等にかかわらなければならぬ。Aちゃんだけ特別視してはいけないのではないか」と悩んでいました。でも、Aちゃんの問題行動は無くならないし、どうすればいいのかと迷っていたころ大地協の障がい児・者研究会（以下：障研）に参加するようになりました。

障研での学びは、私の意識に少しずつ変化をおこしました。それは、Aちゃんに対して「困った子ども」ではなく、「困っている子ども」ととらえるようになり、「特別視」ではなく、「個別なかかわり」が必要なんだという気づきがきっかけです。

それから、Aちゃんとも、気持ちにゆとりを持ってかかわることができるようにになっていきました。すると、Aちゃんは、少しずつ素直に甘えを表現することが増えるなどの小さな変

化を見せるようになりました。

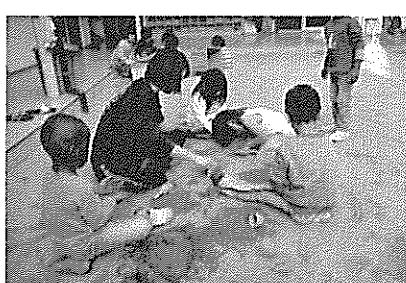
その後、「Aちゃんと個別にかかわることで彼女の行動に変化が見られ、友だち関係も良好になりました」と報告したいところですが、実際は、「十分に受けとめ、かかわることができないまま卒園してしまったのではないか」という気持ちもありました。

当時の私は、自分の行動に対して、すぐに結果が見えないと「何でわかってくれないのでしょう」と考え、悩んでいました。しかし、今では、子どもたちが成長していく中で保育園時代の経験を人生の礎とし、将来に繋がってほしいと考えるようになりました。

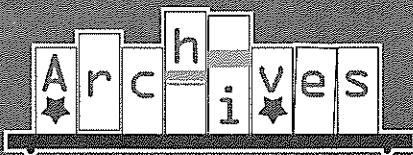
人は「普通」でいることに安心する面があります。しかし「普通」とは何なのか。1人ひとりのありのままの姿を受け容れ、認められる社会であるなら、社会的排除の問題はおこってこないのではないかと思います。

**生**まれ育った環境や成育歴などにより、その人の当たり前の尺度は変わってきます。自分にとって当たり前ということが、他者にとってはそうではないことがたくさんあります。「普通」という多数の側から外れる人が何故マイノリティとなり、生き辛さを感じる社会なのかということを考えることができるのには障研の場があるからです。

子どもたちにとって保育園が安心できる場であり、第2のお家と感じができるよう、子どもたち1人ひとりの個性を受けとめ、全



人格的存在として認めしていくことを大切にしていることを思っています。



# 大阪のセツツルメント

創刊にあたって

大阪セツツルメント研究会編

大阪セツツルメント研究会編

## 大地協アーカイブズ

このアーカイブズは 大阪の福祉実践がかつてもっていた  
広範な視野・民間性・在野性を先輩の文献・記録などから学ぶことにより  
今の問題について新たな視点で取り組む手がかりとなればと思います。  
ご一読ください。

地域福祉の諸問題  
—昭和61年度—  
(学童保育のことどもたち)

大阪市コミュニケーションセンター研究協議会

昭和52～55年頃の「地域福祉の諸問題」  
大阪コミュニケーションセンター研究協議会  
日本生命済生会社会事務局

# 石井十次先生の没後五十年に憶う

大阪セツツルメント研究協議会 会長 三木 達子

「明治維新は日本の社会を一新し、日清日露の戦争は外に国威を発揚し、産業革命は内に人々の繁栄をもたらしたかにみえたが明治の時代は栄光の道ばかりではなかった。

この背後には、いたましい社会的貧困がいたる所で露にされた。しかもこの貧困に差しのべられるべき国家の施策は、何一つとしてなかつた。石井先生の岡山孤児院は、このために個人がなし得る限界を、はるかに越えた大事業でもあった。

今日では社会福祉の問題は個人の篤志や犠牲から国家の仕事に移り変わりつつある。

福祉国家の名の如く福祉は制度化されようとしている。しかし制度化されたものにはその精神が没却されがちである。

制度化形式化の時代にあってこそ石井先生のような真摯にして強烈な魂の存在が私たちの心に強く訴えるのである。

社会福祉が制度としていかに進んでも先生のごとき熾烈な精神を有する民間社会事業がなお存在することの必要を感じるし、そこにも石井先生が再評価されねばならぬ第二の理由がある」

この文は、石井十次先生没後五十年、生誕百年を記念して出版された。石井十次の生涯と思想（大阪市立大学助教授柴田善守著）の巻頭のことばとして、石井記念愛染園理事長大原総一郎氏がお書きになったもの一部です。石井先生の短くして長かった生涯の中に、セツツルメント事業ととりくんでいる私達にとって不朽の真理として忘れることの出来ない強い感銘を与えられた点を以下少し解説してみた

いと思います。

(1) 私はまず、先生の眼、心の眼を考えてみました。女巡礼の連れた幼児一人を引き取って世話を始められたのが孤児院の起りだそうですが、明治20年頃の西国にはこうした巡礼の姿などざらにあった風景だと思います。

世の中の大部分の人の眼には特別にめずらしい大事件でもないこの幼児が先生の眼にはどうしても捨てておけなかつたのです。

雪の日やあれと人の子樽ひろい。とゆう句がありますが氣の毒だなあという程度にうつる人は多いけれど石井先生の眼には見のがせない問題として眼の底深く喰い入ってしまったのだと思います。

(2) 石井先生の胸、眼にうつった映像が強い電波で胸に伝わるとそのあたたかい胸は敏感に福祉に欠ける面をクローズアップして、ほのおとなって燃え上がり、やむにやまれぬ気持ちは順序も手段も一切の計算も度外視して、時に冒険あえて辞せず命がけでもやる。

石井先生の日記（明治20年8月28日）によれば我心已に決せり。われは数多究困の弟妹なる孤等のため即ち主の御心を悦ばしめ奉るためにはただに謗らるるのみならず、岡山に於て餓死するも亦甘んずるところなり。と書かれているこの意氣この心境、この情熱こそ石井先生の比類なき宝だと思います。

(3) 社会事業家の手足

石井先生が、六年間まなんだ大切な医学書を焼き捨てて意を決しられ悪戦苦闘、孤児の生

命を守るために努力された姿は公費をまちがいなく使うだけの機械的な人間の想像も及ばないものがありましょう。

救わざるべからざる弟妹等は多く、弟等を救う力は誠に微なり

嗚呼、一滴の雨水は至誠なりといわれども雖ども 大地を充たす時は

千畝の田地を養う可し、若し四方の兄姉、有志家慈善家諸君にして同胞相憐れむの情をもって赤心より応分の力尽くしたまわば各自の出だす所は僅少なりと雖も衆力の合併するの至りては莫大の集額となり 涌く会員を募りその赤心より義捐する所の金殻を以てそれが費用に供す

先生はこつこつと足を運んで手を働かせて、金殻を集められ同志をつのられた様子が、その孤児教育会趣旨書の中に明瞭に記されています。福は寝て待っていても来ないし、棚からぼたもちは落ちて来ません。

#### (4) 石井先生のねばりづよさ。

石井先生の拾い上げられた一人の巡礼の子はついに1,200名に達し、大岡山孤児院に成長しましたが、宮内省からの御下賜金が下り、内務省の助成金が出され、大原孫三郎氏の強力な支援をうけるところまでこぎつけるには実に18年の歳月と、数知れぬ忍耐の累積がありました。一生涯、余生命をうちこんでの長い長い闘争の連続であったことをしみじみ考えさせられます。苦労するばかりが能でもあるまいと現代の賢い人は申しましようが、楽に、もうかる仕事なら誰でもやります。陽のあたらぬ、やりばえのしない、その上自分の口もひ上がりかねない社会事業をたのまれもしないのにやらねばならぬとは一体どういう因果でしょう。しかしいくら世の中が進歩しても、いつもどこかに

こうした人間のはきだめはつくられる。根気よく物づきな人間が自己満足でやっているそんな見方も出て来るかもわかりませんが。

#### (5) 石井先生とセツツルメント事業

私が最後に最も心ひかれた事は石井先生の歩まれた社会事業家としての足跡です。

字句の解釈でなく真のセツツルメント事業は石井先生の歩まれた足跡にはっきり示されていると思います。

乞食の親分という世評も甘んじて受けつつ、逐次事業内容の充実に努力され、日本最初の小舎制度委託制度と歩一步前進をたどり育児事業の先端を切ってゆかれた足どりは、全く幼稚な当時の斯業界に組織あり秩序ある私的経営の範を垂れた殊勳者として後に小河滋次郎先生が激賞しておられる通りであります。この誰からの命令でも圧力でもない自由な立場で、自身の肺ふからにじみ出た新鮮な気分で、常に開拓の一途をたどられた尽きることのない躍進のあと、あの最盛期と人はたたえる1万1千坪の広大な大孤児院の時代に、先生は最も深刻になやまれた。私はこの苦惱に最大の敬意を表したいのです。幾多の苦難をのりこえて栄冠をかち得た時、凡人ならばどんなに満足と誇りを感じる事でしょう。しかし石井先生は「社会の劣敗者の遺伝をうけて逆境に弄ばれた孤児は一代の教育だけでは到底立派な人間にはなれぬ。その子供の孫に至って理想的の人格を作ることが可能だ」と、三代にわたる遠大な教育理想に立って、天下に高い岡山孤児院の建物を殆ど挙げて茶臼原に移し、新しき村の建設に飛び込みました。

セツツルメント事業は決して固定した事業でない。時代の激変の谷間に振り落とされた劣敗者の姿はその時代の変遷とともに常に移り

かわってゆく。生存競争にやぶれた人の共通の点はあるが直接の問題としての現れ方は青少年問題にしても時にヒロポン中毒患者となり時に非行少年と呼ばれ時に愚連隊となる。

それぞれが一応法によって守られるまでの刻々の活きた問題の処理と出来る限りその予防のために、隣保活動が活きた役割を果たして行かねばならぬ。そこに社会事業家独特の眼が、手足が、情熱が要求されると思うのです。

安住の地に片時も止まることを知らぬ石井先生、生まれ落ちて以来死に至るまで与えるとゆう事の外知らない人。

徳富猪一郎先生はこうもいつて居られます。  
「石井君に於て特に認むる所の人格は何であるかといえば、情極めて熱烈であるとゆうこと、意志極めて鞏固であるとゆうこと、理知の点に於ては遠慮なくいえば、聊か平均を失っていたのではないか」と「平均を失っていた所が石井君の石井君たる所以である。」

石井先生にお会い出来なかった私ですがほんとにわかるような気がします。

セツツルメント事業とは、そのような心の平均のとれない物事の打算の出来ない人間にのみ与えられる仕事なのだと心の底から共感を呼ぶ次第です。

石井先生にはその性來の素質の上にキリスト教という偉大な力が加わってこの大を成したといわれます。静かに石井先生を回顧して今の時代に石井先生が出現されたら何を行われるだろうかと想像し乍ら、凡そ近代化、合理化の動きに縁の遠いと思われる石井先生に謹んで深甚の敬意と追慕を送る次第です。

(石井十次の生涯と思想) を読んで。1964年5月

『地域福祉の諸問題』第三輯、1964年6月刊より再録。

注：肩書名称、表記は原文のまま。今日用いない用語も歴史資料としてそのままとしました。



三木 達子

### 地域福祉の諸問題

第三輯

1. 石井十次先生の扶養五十年に據る
2. 隣保事業の歴史について
3. 第七回主大祭社会福祉技術研究会における  
第四都合報告

1964.6.

大阪セツツルメント研究協議会  
朝日新聞大阪厚生文化部編集会  
大阪市社会福祉協議会

『地域福祉の諸問題-昭和52年度-』1977年3月刊より再録。

# ボランティア育成の反省

大阪市立大学教授  
大阪ボランティア協会理事長 柴田 善守

皆さん、今日は。私は大阪市立大学で生活科学部長をしておりまして、いろいろと雑用が多い体です。また大阪市立大学というところは学生運動がさかんなところでありまして、現在もきびしい状況にありますので、本日の会合でお話しをするのも躊躇いたしましたが、松村さんの強引な口説きと会長さんが阿部先生なら何としても行かねばならないということで出てきたわけです。

まず私が責任者となっております大阪ボランティア協会の歴史からお話ししてみたいと思います。ボランティア協会12年の歴史をもっておりますが、その前3年ほど私ひとりでやってきた時期があります。そのきっかけは大阪市の社会福祉協議会におられました矢内さんが新聞を見て投書に「私はボランティアとして施設に行っているが、どうも先方さんは喜んでいないらしい。迷惑に思っているらしい。」という意味のことばがあるのを発見したとのことです。大阪の4大新聞の投書係に聞いてみると、このような投書はときどきあるということでした。この投書の主に連絡して集まつもらいました。

当時私は石井記念愛染園へよく行って学生ボランティアと行動をともにしていました。ボランティアというとすぐに大学生のボランティアが私の中に浮かびました。そんなイメージをもっておりました私にとってこの第1回の会合は全くの驚きでした。30人以上の方が来られましたがその半数は勤労青年でした。この青年たち

は大企業につとめる人びとではなく、むしろ小企業あるいは零細企業につとめる青年たちで、日曜日をつぶし残業のあい間をぬって活動しているということでした。4分の1は主婦でした。日本の主婦がボランティア活動をしているとは思いもかけませんでした。のこりが学生で、その中には高校生がおりまして一番よい発言をしてくれたことを思い出します。

大学生の場合、自分たちでグループをつくり、グループの方針をきめて、そのなかで活動をすることが多く、ボランティアの大切な性格である謙虚さにかけるのをときどき見かけます。これはのぞましくないと思っていますが、このときも大学生の発言は何かひとりよがりのようだったことを思い出します。

これらの人びとと毎月1回話し合うことにしました。消長はありましたが、だんだん会合に集まられる方が増加してきました。日本生命済生会が援助してくれるようになり、ボランティア協会が生まれたのです。

戦後大阪では学生ボランティア協会が23年に生まれますが成長しませんでした。31年にも同種のものがつくれましたがやはりつづきませんでした。そして40年にこの大阪ボランティア協会が誕生しまして現在まで生きのびています。40年ぐらいからボランティア活動のブームが起り、その時流にのったからでしょう。

ある青年は「ボランティア活動というのはやればやるほどわからなくなります。ボランティア

とは何かと問われてなかなか説明できない。学校をつくったらどうですか。お金はらってきますよ」と提案しました。「本来無償の行為について指導するのに有料の学校を設ける」ということいろいろなやみましたが、思いきって毎週金曜日夜3時間3か月コースを開校しました。定員は40名で授業料はたしか900円だったと思います。すぐに満員になりました。これが日本で最初のボランティア・スクールだと思います。以来現在まで40回ほどになります。

たしかに「ボランティア」ということばは英語ですし、「ボランティア活動」がキリスト教社会で生まれたことも事実です。だから日本ではボランティアは生まれないし、成長しないという人があります。しかし自発的に社会のために何かしようとする人たちはどの社会にもあったと思います。この人たちをボランティアと名づけるならば、日本の社会にもあったはずでしたまた成長すると思います。

江戸時代、京都の四条通はいまどちがって5間か6間の街はばであったようです。京都の古い家はいまでもですが、通りに面したところは「れんじ」になっています。中京区、下京区の町を歩かれたら「べんがら」でぬった「れんじ」のある家をいたるところでみることができます。この「れんじ」の家が四条通に多くあったわけです。「れんじ」というのははずすことができるのあります。これをはずしますと通りとつながります。

祇園祭は一名屏風祭ともいいます。いまでも祇園祭になると、中京、下京の古い家では「れんじ」をはずして屏風を立て、その前に家宝をならべます。人びとはそれを鑑賞して歩くのです。江戸時代はこの「れんじ」を通して家族と地域社会が結びついており、孤独な家族はな

かったといえます。

大阪の船場でも大正6年に軒切りということが行われました。それまでの船場の商店街では軒が長く通りに出ておって、そこが商品の出入の場であり、でっちや小僧の仕事場であるとともに、子どものあそび場であり、地域の人たちの話し合う場でもあったのです。近代化とともに街を広げる方に重点がおかれるようになり、四条通も船場も心の通いあう場を失なったと思います。人びとの話し合う場も助けあう場も同時に失なったのではないかと思います。

第二次大戦後、ヨーロッパの諸国も日本と沿うように住宅問題になやんだのですが、イタリアの団地計画を読んだことがあります。それによりますと、大きな団地はつくらない、最も大きても2000戸であるということでした。この団地の各棟がただ住宅の集合ではなく、一階がロビーになっていて、各戸の住人は必ずこのロビーを通って行くわけです。ロビーでコミュニティがつくられるわけです。それは四条通の「れんじ」であり、船場の長い軒だったわけです。

日本の団地は居室の集合体であり、コミュニティ・センター的な建物ではないが限られた人たちの集会所となっていると思います。私の友人で戦後最初の住宅団地だと思います香里に入居した人があります。その奥さんは「これでうるさい近所づきあいから解放されます」と喜びいさんで入居したわけですが、1年ほどたまるとノイローゼになってしまいました。白いコンクリートの壁のなかにとじこめられた孤独の世界におちいってしまったのです。

核家族化と生活の都市化は民主主義の象徴であると私は思ってきました。自由と平等がこのなかで実現すると私は思いました。大都市という小さな空間に住む多くの家族がお互いに知

りあうこともなく、20センチメートルほどの壁をさかいで生活しているのです。御存じの通り核家族というのは夫婦を中心とした家族で必然的に高令者家族を生産し、また長期の病人や障害者が家族員にできると聞きに瀕するのです。母子家庭や父子家庭となりやすい家族なのです。

このような脆弱な家族は社会によっていろいろな形で支えられなければならない家族なのです。そのひとつが社会保障あります。社会保障は個人や家族の所得を保障する制度で、老齢年金とか医療保障とか児童手当などに分かれますが、これらの制度は本来国家の政策であり、制度あります。北欧を中心としてヨーロッパ諸国では整備されており、これらの制度に支えられてこれらの諸国では核家族化が進んだといわれています。

日本の戦後は社会の近代化、いまいいました家族の核化と生活の都市化が先行して、社会保障制度がこれを追いかけるという形できたように思います。社会保障制度はヨーロッパには及びませんが、また形でも公的扶助である生活保護が主体となっていますが、一応最低生活はなんとかできるようになっています。各種年金や社会保障は十分ではありませんが制度化されています。

ところで、現在の日本の社会の状況を見ますと、核家族率は45年ごろまでは国勢調査のたびに大きくなってきていますが、50年の国勢調査では60%ぐらいで45年のそれとあまりかわらないのです。ヨーロッパでは70%～80%に核家族率です。つまり10世帯のうち、日本では6世帯が、ヨーロッパでは7～8世帯が核家族なのです。ところが60才以上の老人の60%が子どもと同居しています、高齢者世帯とか独居老人の率はヨーロッパなどに比して少ないので

す。その理由について社会学者は社会保障が充実していないからだといっていますが、ここに日本の伝統的文化の抵抗があるのではないかと私は思うのです。江戸時代以来の儒教的な価値体系がどこかにのこされているように思うのです。

千里ニュータウンのチャルシーというショッピング・センターの屋上から見ますと、これが日本の街なのだろうかと思います。高層住宅が建ち並んで広い道路があり、自動車が小さく見えます。ところが住宅の中に入っていますと、たたみの部屋があり、土足で入る住宅はひとつもないのです。こんなところにも日本の文化の抵抗が見られます。

さきほどヨーロッパの諸国は社会保障が充実していると申しましたが、その基盤に長いキリスト教の歴史があり、教会を中心としたコミュニティの伝統があり、地域社会は住民がつくるという主体性があるといわれます。この住民の主体性こそ社会保障をつくり推進させる原動力ではなかったかと思います。

ただ形式的に福祉国家をつくろうとしてきた日本の場合、この10年ようやくコミュニティの必要性に気がついて、各地でコミュニティづくりが叫ばれていますが、いまひとつという感じがいたします。コミュニティづくりこそ日本の文化というものを基盤にしなければならないのであって、ヨーロッパのまねをしてもだめだと思います。

現在の日本におきましてはコミュニティづくりこそボランティア活動の最終課題であると思いますが、このボランティア活動も必然的に伝統文化をふまえねばならないと思います。人間の自発性、主体性は人間であるかぎり、みなもっていると思います。しかし、それをいかに表現するかはその社会と歴史によって変化するので

す。その人が生活をしている文化によって形は異なると思います。

先月、民生委員60年の大会が大阪で開かれました。その時林市蔵さんを中心とした小冊子が大会参加者に配されました。あの冊子は私が書いたものですが、日本におけるボランティア活動の重要な一形式であると思います。

明治以来、日本の社会福祉は民間の人たちによって行われてきました。その民間の事業の多くは伝来して間もないプロテスタントの信者によって支えられたのです。石井十次とか留岡幸助などはその代表です。明治時代の民間社会福祉は信仰と情熱を基盤として大きな業績をのこしましたが、明治末期になりますと。新しい社会福祉とその理論が要求をされるようになります。その代表者が井上友一と小河滋次郎であると思います。この両者がともに儒教的な理論であることも興味深いものがあります。そこに伝統的文化と社会福祉の結びつきがみられると思います。

このような明治から大正への社会福祉の動きの背景に日露戦争を契機に産業革命を終了した日本の資本主義に対する社会主义の抬頭があり、社会福祉の理論化によって社会主义に対する防波堤としようとしたこと也有ったのですが、同時に個々の社会福祉と民衆との間を結びつけるためにも社会福祉の理論が必要だったのです。社会福祉が民衆と無関係な対岸の火ではなく、つねに民衆と身近な存在であるということを知らせる必要があったと思います。さらに社会福祉を必要としている人びとが民衆のなかにあってもそれらの人びとと社会福祉とを結びつける手段がなかったのです。社会福祉が特別な特志家のする仕事ではなく民衆自身の事業であるという自覚をあたえるためにも、社会福祉が民衆のもつ文化、生活の上

に立たねばならなかったのであります。

方面委員の理論は小河滋次郎さんが担当し、その実施にふみきったのは林市蔵さんです。大正6年のくれに林市蔵さんは山口県から大阪府知事として赴任します。大正5年の大晦日、林さんは今の愛隣地区、いわゆる「釜が崎」ですが、ここを視察します。案内をしたのは中村三徳さんで、その時、「大阪というところは社会福祉が日本一進んでいるところだと聞いてきたが、なぜこのような貧民街があるのか」と素直に批判しています。

国がやらなければ自治体がやらねばならない、林さんは大阪の民間社会福祉と自治体の協力でこの事業を推進しようとするのですが、自治体には担当する部局がない、林さんはそこで府に救済課を設置します。これは日本ではじめての社会福祉担当課です。この救済課は形式的には警察部にありますが、実質的には知事直属です。この課には府職員中から有能なものを置きます。課長には篠原といつて後に内務次官になった人を、係長には半井といつてのちに神奈川県知事・大阪府知事になった人をおきます。

実際には府は社会福祉において何をすべきか、それが方面事業なのです。方面事業はあたかも米騒動を契機に偶然生まれたようにいわれていますが、小河滋次郎さんの長い研究、また前年岡山県では笠井知事による済世顧問の制度があり、米騒動によって一挙に開花したとみてよいのです。一般民衆を社会福祉の補助として参加させようとするわけです。日本におけるボランティア活動であるといえます。

イギリスにおいてもCOS運動やセツルメント運動がでてくる19世紀後半は社会福祉が民衆の参加をもとめるときボランティアということ

ばがつかわれるので。方面委員は民衆の参加の一形体だと思います。日本のボランティア活動のはじまりとみてよいと思います。先日アメリカの大学生が大阪市立大学にやってきましたので、「日本の社会福祉」というテーマで話したのですが、学生たちは「当局によって権威づけられたボランティア Authorized Volunteer はおかしい」というのです。

アメリカでボランティアを取材した映画のなかで、病院ボランティアをしている女子高校生に、「なぜボランティア活動をしているのですか」とたずねているのですが、その答えに窮して、「お母さんがやっていたから」というのです。そこにアメリカの文化があると思います。長い歴史のなかでボランティア活動が生活の一部になっているのです。

大阪ボランティア協会は全国にさきがけて、ボランティア・スクールを開設しました。「ボランティアとは」という講義をおきました。日本はどうしてもこの講義が必要なのです。日本でボランティア活動をする人は「ボランティアとは何か」「なぜボランティア活動をしなければならないか」を必ずといってよいほど考えるのです。

何百回かこのはなしをするうちに、これでよいのだろうかと考えるようになりました。自発性とか主体性との抽象論よりも具体的に日本の社会にボランティアはほんとうになかったのだろうかと思うようになりました。そこで考えたのがこの方面委員制度なのです。「当局によって権威づけられたボランティア」ということで、ボランティアでないのだろうか。方面事業を研究しているうちに、日本的なボランティアの一形体であると考えるようになりました。方面委員はたしかに知事から委嘱されるのですが決して消極的な姿勢ではありません。また知事はこの制度の成否は人であることは知っていました。特

に最初の方面委員がこの制度の将来を決定することを知っていました。

ですから、現在に行政でしばしば見られるように、大阪府下一斉につくるというようなことはしませんでした。係長の半井さんは府下の各地で方面員制度をつくってほしいという声があつて知事につたえるのですが、知事はなかなか承知しない、まだ早いというのです。また方面委員の人選にあたって名簿をもって行くと、いわゆる名士はだめだというわけで、何度も修正していくのです。ひとつの方面をつくるのに半井さんは大変苦労したといっておられます。

人のなやみをきき、相談にのる人ですから、それだけの人でなければならない。そのような人を林さんはどのようにして把握していたのでしょうか。大阪の警察は当時、社会福祉にきわめて協力的でした。林さんが大阪に赴任したとき愛隣地区を案内した中村さんは当時府警察部の保安課長をしていましたが、この地区的浮浪者の宿泊所であった自彊館の経営者となり、さらに毎日新聞社会事業団の常務理事となり、八尾隣保館長となり、戦時中は八尾市長になり、やがて府下の社会福祉の指導者がありました。

この中村さんの上司であった池上四郎さんは明治33年から大阪府警務長（のちの警察部長）で大正2年9月に請われて大阪市長となり、大阪市における社会福祉路線をしいた人であるといわれています。その他、武田慎治郎、天野時三郎という人たちがありますが、いずれも上記の人たちと同じころ警察署長をした人ですが、武田さんは現在の府立修徳学院の前身である修徳館の創設に努力し、2代目の館長となり、のち養護施設武田塾を私財を投じてつくっています。天野さんは徳風・有隣の両夜学校の創設に努力し、のち大阪市社会部の初代部

長に就任しています。

ちょうど、米騒動のあった年は、大阪府には林知事、小河博士があり、市には池上市長、関助役（この人はのちに市長になった人ですが、社会政策の学者でもあった。）があり、民間には日本社会事業史に欠くことのできない人たち、たとえば博愛社の小橋実之助、婦人保護の林歌子、大阪養老院の岩田民次郎、桃花塾の岩崎佐一、石井記念愛染園の富田象吉など錚々たる人物がいました。

林さんは米騒動の混乱のなかで警察から適確な情報を得ていただけでなく、府下各地で貧困者のためにつくし、民心の安定に努力した人たちの働きを聞いていました。

さて、方面委員制度をつくろうということになりますと、林さんや小河さんの意中には警察からの情報などである程度の人物がすでにあつたわけですが、方面委員を委嘱される先方さんはいきなり知事さんからのおねがいにびっくりするわけです。同時に感動して「やらせてもらいましょう」というわけです。いまではそういうわけにはゆかないでしょうが。

林さんは方面委員が参りますと、知事室に通して襟を正して会ったということです。戦後アメリカの占領軍が民生委員制度を廃止しようとしたことがあります、林さんは徹底的に抵抗して「日本独自のものだ」といい、いわゆるボランティアとちがって日本の文化に根ざしたものだといっています。私は日本のボランティアのひとつだと思うのですが。さきほど、ふれましたアメリカの学生に、方面委員制度の基本である「無報酬の報酬」ということを説明しましたが、なかなかわからないようでした。諺にある「情けは人の為ならず」というようなものではありません。林さんはこのようにいっています。

何を以て諸君の御苦労に報いるか、何も名誉心という訳でもなければ、物質上の報酬というようなものがある訳でもない。

諸君に対する報酬としては実は解決したと近年思って居る。それはこの間も御話致しました如く、誠に諸君が此事業に於いて御尽力中である中に、報酬は他に求めずして自ら得られるだろうということを近來発見して居る積りであります。是誠に勝手な申分ではあるけれども私はそう感じて居るのであります。

小河さんはこのようにいっています。

人を救うて慈善を施し、人を助けて恩恵を加えたという如き塵計りの野心を持たぬ。救助を救助と言わずして、手伝いと称し、指導を指導と呼ばずして相談と唱え、手伝いするとか、相談をするというような用語を避け、常に手伝いをさせてもらう、若くは相談をさせてもらうという風な謙遜な語調に出すことを努めることなく、それが自然的慣用せらるるようになって居る。・・・人を教化するは自己を薫育修養する所なりと信じ、先づ自ら進んで之を真の心に反省し、其物に実践する所あらんことを務める。

林さんは方面委員の事業を天命と考えていました。方面委員は「天の命を奉ずる天使」であるといい、「進んで天意に隨い、身神の努力を捧げ、我々に恵まれたる天職にいそしむことは幸福なる運命にある」といっています。方面委員の多くが林さんのこの考え方賛成し共感していました。林さんが方面委員におねがいすることは、方面委員は天意としてこれをうけとり、積極的に行動をすることでした。またたえず、担当地区をまわり、援助を必要とする人を発見すると、骨身おしまず援助をただちに開始します。それが天意であると考えるのであります。どこか、ヨー

ロッパ的な発想とちがったものを感じますが、このようなところに伝統文化があるのではないでしょうか。

しかし、戦後の民生委員制度にこの精神がうけつがれているかというと、少し淋しいように思うのです。先日もNHKの「福祉の時代」で、大阪の名誉民生委員で、昭和9年から方面委員をしておられました吉宗先生と対話しました。その時、吉宗先生はこの精神がぬけてしまったとなげいておられました。もちろん民生委員のなかにはよくやっている人もあるのですが、いまでは福祉行政への協力者であって社会福祉への協力という面がなくなってきたているように思います。

長い間ボランティア協会をやっていましたと、初期方面委員の活動や性格を今一度考えざるを得なくなったのです。ボランティア協会をはじめましたころ、ぞくぞくとボランティアがあらわれてくると私は思いました。民主主義の社会になったのだから必然的にボランティアが出てくるはずだと私は思いました。またアメリカ人学生のように Authorized Volunteer などありえないと思いつきました。しかし、方面委員もボランティアであり、このようなボランティアがあるのはまた日本の文化ではないかと思うようになりました。呼びかけばやってくる人が日本の社会には大勢いるのです。

先日も車イスに乗った障害者を市バスに乗せようとしたしました。2人のボランティアではなかなか乗せられないのです。バスの中には10人くらいのお客がいるのですがだまって見ているだけです。そこでボランティアの1人が車内に入つて「協力して下さい」と乗客に呼びかけたのです。すると4人の若い女性の客が降りて助けてくれました。運転手は「迷惑をかけないで下さい」といったのです。「御協力ありがとうございます」といっただけです。

ました」となぜ運転手がいってくれなかったのだろうか、と私は思いました。

ここに2つの問題があるのです。ひとつは呼びかけば日本人はやってくれるということです。他は交通局側を代表する運転手は乗客に「迷惑をかけた」という意識です。社会調査などではボランティア活動はやりたいという人はかなりいるのですが、「だれかがさそってくれたら」と思っている人がたくさんいるのです。バスにいた若い女性の乗客は迷惑に思ったのでしょうか。心のなかでは「何かしてあげたい」と思っていたにちがいないと私は思うのです。それがそのまま行動にならないのが日本の文化ではないかと思います。障害者の側から協力に対する謝意があってもよいと思います。「迷惑」ということばはもっと深い意味があるようですが。

私の母の茶道における号を三従庵といいます。三従とは女大学にててくる、「幼くしては親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」からとったのですが、これは日本の女性の生き方をいっていると思います。日本の歴史ではつねに女性が表へでて来ないので、またでてくる女性は評判がよいとはいえないのです。

戦後、男女の平等が憲法で保障されました。多くの女性は職場に進出するようになりました。それでも女性の行動はやはり古い文化の拘束が残されているように思います。先頭に立って行動する人は意外に少ないように思います。

このような事実はどうも女性ばかりでなく男性にもあると思います。さきの方面委員にしても「やってくれゆうからやります」という発言です。私はこれが責任回避というのではなく、謙虚さを見たいのです。

日本語には敬語というのがあります。敬語は相手も敬うとともに自らはへり下すことだと思い

ます。英語にはありません。先日もある社会福祉の先輩から聞いたのですが、日本人は食物にも食器にも御の字をつけて、「ごはん」「おはし」「おわん」「おみおつけ」など敬語をつける。「御馳走」というのは、馳は動物の労働であり、走は人間の労働であり、これらへの感謝であるということだそうです。

文化の表にはでて来ない日本人の謙虚さというものがあると思います。「生きている」ではなく「生かされている」という仏教的な生命観が一番底にあるのではないかでしょうか。さきほどの「迷惑」論もこのへんから見直す必要があるかもしれません。「生きることは借りをすることだ、そして生きることはその借りを返すことだ」とある日本の現代詩人はいっていますが、こんな自覚こそ日本のボランティアにあるのかもしれません。はじめにいいました「ボランティア活動をしているが先方さんに迷惑をかけているのではないか」という謙虚な問い合わせ生まれると思います。ヨーロッパだったら先方にたずねるし、先方も行動を指示すると思います。

このような伝統文化とうらはらに地域エゴまるだしの住民運動があちこちにみられるのです。大阪市が精神薄弱児施設をある地域に建設しようとしたところ、地域社会から猛烈な反対をうけました。「こんな施設ができたら、うちの子は危険でようそに出せません」という発言が主婦の口から出ていました。いわゆる健全者の思い上がりと無知を感じました。

都市交通の問題でも交通機関は市民のための交通機関です。むかしの田舎の道はだれでも歩ける危険のない道でした。まず都市交通は車中心の道路ですし、交通機関は健全者中心の交通機関です。また産業のための交通機関であり、運送機関です。たしかに車も産業も大切ですが、そのために障害者や老人が疎外

されてよいということにはならないでしょう。

さきほどのバスの運転手のことばではお客様はいわゆる健全者であって障害者はお客様ではないということになります。人間の社会は健全者だけで構成されているのではありません。老人も障害者も子どももその構成員であり、どこでも、いつでも見かけるの当たりまえであるはずです。老人や障害者は何も危険をおかして地下鉄にのらなくてもよいというのは間違いだと思います。乗るのが当たりまえでそのような配慮をするのが当然だと思います。ところが、現代の都市生活ではこの当然といえることが拒否されているわけです。このような一般の価値観をいかにして変えていくかが急務だと思います。この先端にあるボランティア活動こそ大切だと思います。市バスのなかの助け合いはよい社会教育になったと思います。

コミュニティづくりが現代日本ではボランティア活動の目的であると申しました。このコミュニティはむかしの排他的な村落社会ではなく、自由な個人によってつくられる地域社会であり、出入りは自由であり、地域も判然としません。しかし、そこに住む人はみな仲間であるという社会です。同時に無限に広がる人類の社会にもつななるというものです。とくにボランティアの諸君にはこの自覚がほしいと思います。

キリスト教社会では神の前の兄弟という人類意識があると思います。私がかつて翻訳しましたジェン・アダムス Jane Addams の「ハル・ハウスの20年」という本のなかで、アダムスが少女時代、お父さんと馬車に乗って森の中を散策しますが、道に迷ってしまいます。若者のように上気して道しるべを探す父に向ってアダムスはたずねかけます。

「お父さん、 いまだれかが『あなたは何ですか』とたずねる人があったら、何と答えますか?」

「『私はひとりのクエーカーです』と答えるな」「それではあんまり簡単じゃなくって？」  
 「だれかさんのようにそんなしつこくたずねる人があったら、何と答えますか？『いなかものクエーカーです』と答えるな。」  
 「ひとりのいなかもののクエーカー」、それは人間であるという自覚ではないかと思うのです。アダムスの父は中部アメリカの開拓者であり、土地の地主であり、資本家であり、州の上院議員であり、リンカーンの友人でもあったのです。ジェン・アダムスはこの父の精神をついだ人だと思います。

このような表現は日本にもあります。日本で最初の公害事件である渡良瀬川鉱毒事件の告発者田中正造の日記は、「我は下野の百姓なり」ということばではじまっています。田中が庄屋の息子であり、日本で最初の代議士であったのですが、この発言もまた人間宣言であったと思います。また彼の生涯のエネルギー源であったと思うのです。

自然科学が発達し、社会的技術である交通通信が地球を狭くした現在、人類は具体的な存在となり、われわれが人類の一員であることには当たりまえのことです。私のいいたいのは論理的な人間存在ではなく、倫理的な人間の自覚です。人間だったら「何をすべきか」ということです。

人間の自覚はいろいろあると思います。家族の一員として、地域社会の一員として、職場の一員として、国民のひとりとしてというふうにある特定の集団の一員としての自覚が普通であります。これらの集団にはそれぞれに対応する集団があります。しかし人類の一員との自覚にはこれに対立する集団はありません。人類愛と他の愛とは根本的にちがうのです。

コミュニティづくりはその地域社会の住民の

生活条件をよくする地域エゴはたしかにあると思います。しかし、地域社会のなかの人びとをすべてうけいれるとき、障害者も老人もすべてをうけいれるときは人類性につながるはずです。自己中心の個人の集団は分裂するはずです。コミュニティづくりの先頭に立ち、中心となるにはボランティアだと思います。

大阪ボランティア協会へやってくるボランティアにはいろいろなボランティアがあり、右から左までといいますか、地道な活動のものから運動的なものまでいろいろあります。私はボランティアというのをそういうものだと思います。しかしどちらの様になってしまってはならないと思います。ボランティアはつねに反省が大切で謙虚さを失ってはならないというのが私の考えであります。

このような意味でボランティアの研修や交流は大きな意義があると思うのです。ボランティアについて社会はあまりに無知ですし、ボランティア自身も知らなすぎるというのが実態だと思います。

『地域福祉の諸問題一昭和 52 年度一』  
 1977 年 3 月刊より再録。

注：肩書名称、表記は原文のまま。今日用いない用語も歴史資料としてそのままとしました。

大地協アーカイブズに寄せて

# 共生社会とボランタリズム

『地域福祉の諸問題』 担当理事 大川 明宏

昨今、よく耳にする共生社会、『我が事・丸ごと』の地域づくり、何か懐かしいような親しみと一緒に若干の違和感があります。

親しみの理由を考えてみました。戦前から地域とその住民との関係性に注目し地域社会の構造をも運動の対象としてきたセツルメント運動、その拠点として存在したのがセツルメント施設です。その活動には共生と地域住民の参加は不可欠でした。なにより地域から、隣近所から積み上げていく過程にその活動の根幹はあったと思います。セツルメント施設を源流にもつ大地協としては親しみがあるのは当然のことだと思います。

**違**和感の理由としては、経済効率による損得勘定が見え隠れしているところだと思います。  
**違**加えて行政主導型の共生社会の創造は地域、隣近所からの積み上げていく過程が無いように見えるという部分もあるといえます。いずれにせよ、共生社会の創造には地域の中に拠点が必要であり地域福祉施設も間違いなくなんらかの役割を担うことになるでしょう。これまで以上に自分たちの町を歩き、見て聴くことを意識していく必要があるかと思います。

今回のアーカイブズでは石井十次先生のことを柴田先生が書きその感想を三木達子先生が述べる「石井十次先生の没後五十年に憶う」と社会意識とボランティアの関係性を掘り下げている柴田善守先生の「ボランティア育成の反省」を選んでみました。

大阪という土地のもつ意識と文化の地域性や、合理性や効率性とはまた異なる価値観のなかで激しく動く運動性とその引力。50年前も今も色あせないその熱量。

三木先生が述べられている「一方セツルメント事業とは、そのような心の平均のとれない物事の打算の出来ない人間にのみ与えられる仕事なのだと心の底から共感を呼ぶ次第です」という一文に象徴されるような価値観。

**此**田善守先生が述べられている「人類の一員との自覚にはこれに対立する集団はありません。  
**此**人類愛と他の愛とは根本的にちがうのです。」という一文で示しているように、共生社会は隣近所からはじめて人間性につながるというメッセージ。その中心にあるのはボランタリズム。

ごく当たり前に労働として社会福祉にかかわるという感覚をもった現代の私たちが、ボランタリーな想いと労働のバランスを取りながら、必要なことは取り組んでいくという自由さを受け継ぎ、次代へ繋ぐことができるのか不安はあります。ですがこの『我が事・丸ごと』の共生社会づくりを違和感に焦点をあてて危機だと訴えるだけでなく、追い風にしてみる。地域社会の構造からじっくりとかかわっていく、隣近所の人たちとのかかわりからはじめてゆく地域福祉施設としての原点にかえって活動していくことができればと思います。

## 巻末資料 会員施設一覧表 2017年5月個人正会員については名簿掲載をいたしません。

施設名	施設長	〒	所在地	TEL	FAX
1 風の子保育園(子どもの家)	松村 寛	533-0004	東淀川区小松 1-11-8	6328-4019	6328-4030
2 都島児童館	村上 明子	534-0021	都島区都島本通 3-16-10- 4F	6921-4385	6921-4385
3 平和の子子どもの家(保育園)	松野 五郎	535-0022	旭区新森 7-1-5	6954-0524	6954-1961
4 育徳園保育所(子どもの家)	倉光 慎二	545-0021	阿倍野区阪南町 5-12-5	6621-1901	6621-1904
5 阿さひ保育園つくし会(学保)	西山 幸恵	545-0051	阿倍野区旭町 3-1-6	6631-4718	6631-1607
6 望之門学童クラブ	藤井 道雄	545-0052	阿倍野区阿倍野筋 5-13-17	6651-7741	6652-8841
7 今川学園隣保館(子どもの家)	篠瀬実千代	546-0003	東住吉区今川 3-5-8	6713-0277	6719-4755
8 さくらんぼ保育園(子どもの家)	万福 潤一	547-0001	平野区加美北 7-7-10	6791-2007	6791-8035
9 港隣保館子どもの家(保育園)	奥田 妙子	552-0015	港区池島 1-3-47	6571-3182	6571-7503
10 四貫島友隣館(子どもの家)	嶋田 良介	554-0022	此花区春日出中 1-15-13	6461-3713	6462-1072
11 愛染園愛染橋保育園・児童館	小谷 啓二	556-0006	浪速区日本橋東 2-9-11	6632-5640	6632-5645
12 児童館・今池こどもの家	小谷 啓二	557-0016	西成区花園北 2-16-26	6632-7020	6632-7020
13 長居保育園(子どもの家)	宮川 ヒサ	558-0004	住吉区長居東 4-11-16	6691-3669	6691-8292
14 やまと保育園子どもの家	名城 善盛	559-0014	住之江区北島 3-17-1	6682-1746	6682-1786
15 キリスト教ミード社会館ミード保育園	富田恵美子	532-0028	淀川区十三元今里 1-1-52	6309-7121	6309-7123
16 育徳園(コミュニティーセンター)	村尾 光宥	545-0021	阿倍野区阪南町 5-12-5	6621-1901	6629-1979
17 大阪市立西成市民館	河崎 洋充	557-0004	西成区萩之茶屋 2-9-1	6633-7200	6633-7203
18 東三国デイサービスセンター なみはや	和田美恵子	532-0002	淀川区東三国 2-12-16	6350-2880	6350-2887
19 水仙の家(高齢者デイサービスセンター)	在町 香月	533-0004	東淀川区小松 1-12-10	6370-2266	6370-2325
20 特養ひまわりの郷	海老子隆一	534-0021	都島区都島本通 4-10-19	6924-8880	6924-8883
21 特養いくとく(デイサービスセンター)	加藤 久美	545-0001	阿倍野区天王寺北 3-18-16	6713-1165	6714-1185
22 高齢者デイサービスセンターいくとくⅡ	檜皮 雅子	545-0013	阿倍野区長池町 18-20	4399-0120	4399-0121
23 愛和デイサービスセンター	安藤 勝子	547-0002	平野区加美東 1-6-35	6796-3520	6796-3751
24 長居西地域在宅SS ながいの里	樽谷美智子	558-0002	住吉区長居西 3-1-6	6695-6645	6695-6654
25 地域生活支援センター 風の輪	加藤啓一郎	533-0004	東淀川区小松 1-13-3	6323-6395	6323-2856
26 都島児童センター	丸山 智子	534-0021	都島区都島本通 3-4-3	6921-5323	6921-5783
27 愛信保育園	曹 薩戸	544-0032	生野区中川西 2-5-15	6712-2020	4303-4778
28 松の実保育園	松本 千幸	545-0021	阿倍野区阪南町 1-16-10	6623-5400	6628-8385
29 望之門保育園	金 恵栄	545-0052	阿倍野区阿倍野筋 5-13-17	6651-7741	6652-8841
30 育和白鷺学園(保育園)	寺田 修	546-0002	東住吉区杭全 3- 9-17	6719-2697	6719-2698
31 今川学園(保育園)	篠瀬実千代	546-0003	東住吉区今川 3-5-8	6713-0277	6719-4755
32 北田辺保育園	戸田 正三	546-0044	東住吉区北田辺 3-6-4	6713-0915	6713-0925
33 メリーガーデン保育園	天野佐知子	550-0013	西区新町 4-13-16	6532-1360	7501-4278
34 めぐみ保育園	奥田 輝代	551-0011	大正区小林東 2-3-5-101	6553-4025	6553-5005
35 わかくさ保育園(あおぞら保育)	蕨川 晴之	557-0004	西成区萩之茶屋 2-9-2	6633-2965	6633-2970
36 愛染園南港東保育園	萱野 優子	559-0031	住之江区南港東 1-6-3-101	6612-1800	6612-1820
37 大国保育園	竹田 陽子	556-0014	浪速区大国 2-13-1	6649-6182	6649-5821
38 アフタースクール KIDS なみよけ	野上 千春	552-0001	港区波除 4-4-18	6583-5230	6583-5231
39 アフタースクール KIDS かわぐち	野上 千春	550-0021	西区川口 3-1-23	6599-9070	6599-9071
40 大阪聖和保育園	長瀬 光子	544-0034	生野区桃谷 5-10-29	6731-6112	6718-2595
41 安立保育園	本山寿美子	559-0003	住之江区安立 4-6-17	6671-8846	6671-8853
42 特別養護老人ホーム ガーデン天使	嶋田 真奈	554-0024	此花区島屋 4-1-11	6460-0028	6460-0025

# **地域福祉の諸問題 2017**

復刊 第2号 2018年3月

発行  
NPO法人 大阪市地域福祉施設協議会

事務局  
〒557-0004 大阪市西成区萩之茶屋2-9-2  
わかくさ保育園内  
TEL.06-6633-2965

印刷所  
株式会社 松村善進堂